旦那様はドＳ

夢花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
旦那様はドＳ

【Ｎコード】
Ｎ７９６４Ｆ

【作者名】
夢花

【あらすじ】
衣は彼を『下衆』と呼ぶ。翔一は彼女を『ハニー』と呼ぶ。衣は彼を拒む。翔一は彼女に飛びつく。衣は彼とは一緒にいたがらない。翔一は彼女と一分一秒一緒にいようとする。彼女は学校ではＳ、家ではＭ。彼は学校ではＭ、家ではＳ。二人には大きな秘密があった。これは、そんな二人のお話。＜現在は更新停止中です＞

第1話　衣と翔一

「女相手にカツアゲしてんじゃねぇよボケ」

ズシャ、と言う嫌な音がしながら男が校庭の上を転がる。
男にそんなことをした女生徒はふん、と両手を腰に当てると、後ろにいる女生徒二人に帰れと促す。
起き上がった男は顔を掴みながら女生徒を睨みつけた。
似た様な制服を着ていることから、おそらくこの二人は同じ学校の生徒だろう。
男子生徒は起き上がると、

「この野郎！覚えてろよ！！」

というお約束の負け惜しみを叫んでから、走り去る。
ふぅ、と女生徒が溜息をつく。

「全く、ここは腐った男ばかりだから、嫌になる」
「うっわぁ、酷いなぁハニー！ここは腐った男だけじゃないよ！」
「黙れ下衆（げす）ハニーって呼ぶな。あたしの名前は衣（ころも）だ下衆」
「うわ、ひどっ！！酷いよ！！どうせなら獣（けだもの）とかエロ魔人のほうがいいよ！！」
「そう思うあんたの頭はどうかしてる！！病院行ってこい！！」

変な内容の喧嘩を繰り出す二人を周りの生徒は黙って見つめる。
日常茶番だからか、特に気にするものはいないようだ。
全く、と呟きながら衣と名乗った女子生徒が男子生徒の横を通り過ぎようとするが、男子生徒がガシッ、と彼女の腕を掴む。
意外と力があるこの少年は、容易くは衣の腕を話してはくれないら

しく、力に自信がある衣でも、彼の手を振りほどくことはできない。

「な、何？」

「べっつにぃ。どういう反応するのかなぁ？って思っただけ―グハァ！！」

「離せ下衆。容易く触んな」

男子生徒の頭を蹴りながら吐き捨てると、衣はさっさと教室へ戻る。それを、頭を押さえながら男子生徒は楽しそうに見つめているだけだった。

男子生徒の名前は神城翔一（かみしろ しょういち）

頭がよく、運動神経もいい。

顔もいいが、性格が軽い奴のため真剣に付き合うやつはいない。

何かと衣につっかかる少年で、彼女の反応を見ては毎日を楽しんでいる。

衣曰く『下衆』『獣』『エロ魔人』である。

「はぁ、朝から疲れた・・・」

「ああ、おはよう、衣。大丈夫？また神城君に絡まれてたけど」

「おはよう。いいよ別に。いつものことだし」

「神城君って何かと衣につっかかるよねぇ・・・・ 衣に気があるんだよね？ハニーって呼んでるってことは」

「ちょっと待って。なんでそんなこといいながら、その『絶対ないよねぇ』の眼差しをあたしに向ける！」

「だって、衣は確かに可愛いけど性格が乱暴なんだもん。男子の敵が多いでしょ？」

「うるっさい」

「へへ」

可愛く笑う黒髪の少女は、衣の頭をポンポンと二回軽く叩くと、急いで隣の席に腰掛けた。

「やあやあ、ハニー！見に来てくれたのかい―あうっ！！」
「触るな下衆」
「は、ハニー。下衆っていうのを気に入ったのか―ウゴホォ！！」
「ハニーって呼ぶなって何回言えばわかるんだ下衆」
「う、なんて酷い・・・・衣様でいいの？」
「それも嫌だけど。まあいいだろう」
「いいんだ・・・・」

帰るために校庭を通る衣と、親友の沙月（さつき）は、何気なく陸上部に目をやったら、運悪く、休憩していた翔一と目がばったりあったのだ。嫌な予感がした衣は急いで目を反らし、歩き続けたのだが、陸上部のエースの翔一に叶うわけがなく、すぐにつかまってしまったのだった。
無理矢理ここに座ってなさい、と強引にひっぱられた衣と沙月は仕方なく残ることにした。

「でもさ、神城君って普段は軽い奴だけど、走ってる時は結構かっこいいよね？」
「・・・・・・・・・・そう？」
「なんで最初に沈黙が続くの」
「別に」
「素っ気ないなぁ、あ、サンキュ」

自動販売機からジュースを持ってきた衣の手からジュースを取ると、沙月は再び走っている翔一に目を向ける。
彼は先程も言った通り、運動神経がとてもよく、陸上部に入団してすぐに三年を抜かすエースとなった。
翔一と衣は違うクラスなのだが、外で体育やってる時に翔一が走ると必ず歓声があがる。
５０メートル走は５秒台で、１００メートル走は１１秒台だ。
女子で一番の記録をもつ衣でも、５０メートル走はギリギリで６秒台、１００メートル走もギリギリ１３秒台なのだ。

「っていうか、衣ってすごい足早いのにどうして陸上部入らないの？」
「ん？ああ、わかんない。中学の時は陸上部だったんだけど、高校に入ったらなんかやる気が失せちゃって」

苦笑を零す衣に、そっか、とだけ言って深入りしなかった沙月に感謝をし、衣も翔一に目を向けた。
さっきはそんなことはないと返してしまったが、確かに走っている時の翔一はかっこいいのだ。
いつものチャラチャラとした態度が見られないからそう思うだけかもしれないのだが、走っている時の翔一は本当に真剣な目をして、真っ直ぐと前を見つめているのだ。
思わずその姿に見とれる自分がいるのは、否定することができない。

陸上部は五時までのため、五時少し前に陸上部が片付けを始める。
それを見た衣は少し微笑んでから、よっこらしょ、とおばさんくさいかけ声とともに立ち上がった。
隣に座っていた沙月は驚いて彼女の後を追う。

「ちょ、ちょっと、衣！？いいの！？神城君にまっててって言われ

たのに！」
「いいよ別に」
「えぇ？」

心配になり、沙月が後ろを向く。
バチッ、と翔一と目が合い、驚いて目を見開くが彼は微笑んだだけで特になにもしなかった。

「え？えぇ？今のわかって帰ろうって思ったの？衣！」
「何のこと？」
「うわっ！ムカつく！！」

沙月の言葉に微笑むだけで、二人は歩き続けると、『知花（ちばな）』の名札がはってある家についた。
ここは衣の家。『知花衣』と続けると、なんとも可愛らしい名前である。
沙月の家はここから何軒か離れているところで、遠いようで近いような距離である。
それで少し困ることもあるのだが。

沙月と別れの挨拶を交わしてガチャとドアを開けてから、ふぅ、と溜息をつくと、衣は電気をつけてキッチンに入った。
エプロンをつけ、冷蔵庫を開ける。

「あ、二人分ちゃんとあるから大丈夫かな」

そう呟き、冷蔵庫から人参、じゃがいも、タマネギを取り出す。
どうやら今日の夕飯はカレーのようだ。

「ただいまー」

「ゲッ。帰ってきやがった」
「ころもー。お腹すいたー」
「はいはい」
そう言いながらエプロンを脱ぐと、衣は玄関へ向かった。
そこには、神城翔一が立っていた。

第1話　衣と翔一（後書き）

こんなんですみません。
題名でわかるとおもいますが・・・・
二人は・・・・・はい、そういうことです。
読んでくれてありがとうございます。

第2話　夫婦

「よう、衣」
「お帰り」
「ただいま」

そう言うと、翔一は衣の頭にキスを落とし、中へ入る。

「っ！！」

真っ赤になったまましばらく玄関で立ち尽くすが、翔一が衣の名を呼ぶと、仕方なく彼女はキッチンに入っていく。
制服のままテーブルの席にすわると、翔一ははぁ、と深いため息をついた。
その姿に疑問を抱き、衣は鍋に具を入れ、ふたをすると、翔一の隣に腰をおろす。

「どうしたの？」
「ん？ああ、いやぁ、別に。もうすぐ陸上大会だからさ、練習がハードなんだよ」
「そっか。いろいろ大変だね」
「まあな」
「もうすぐカレーができるから、着替えてきて」
「おう」

翔一は鞄を持ち上げるとキッチンから出て行く。
と、思ったら引き返し、今度は衣の唇にキスをする。

「んっ！！」

あまりにも唐突な彼の口づけに、おたまをもったまま衣は立ち尽くした。
翔一は真っ赤になった衣の顔を覗き込み、ニッと笑うと、今度こそ部屋から出た。

「んっ～！バカ！！」
「はいはい」

まるで気を紛らわすように衣はカレーをかき混ぜ始める。
翔一は、帰ってくるなり必ず衣にああいうことをする。

まあ、結婚しているのだからするほうが当然だが。

そう。二人は結婚している。
お互いまだ高二なのに結婚しているのは二人の親の関係である。
その会話を再現すると、

（ここからは声だけで想像してください）

『ちょ、お母さん！？今なんて！？』

『だから～。私とお父さんと、翔一君のお父さんとお母さんはしばらく海外出張だから、二人とも一緒に住んでほしいの？』

『いやいやいや！！語尾にハートをつけられても困るから！』

『あら、心配いらないわよ。翔一君はいい子なんだから！ね、怜ちゃん！！』

『そうそう。大丈夫よ、衣ちゃん！』

『ですからおばさん！そういう問題じゃないですよ！年頃の女と男を一つ屋根の下にするってどういうつもりですかっ！！』

『大丈夫よ。うちの翔一はいかがわしいことなんてしないから！』

『母さん、それ本気で言ってんの？俺だって年頃の男だよ？』

『ほ、ほら！』

『翔一！そんなことしたら俺がお前をはり倒しにくるぞ！！』

『ほぉ、わざわざヨーロッパからここに？お金の無駄じゃないか？』

『こらこら翔一君！そんなこと言ってお父さんを困らせちゃだめだろう』

『はーい』

『ちょっと、お父さんは気にしないわけ！？こんなことが起こって！！』

『ん？何言ってるんだ。賛成していなかったら今こんなこと言ってるわけないだろう？』

『ちょっと待って！！みんなが大丈夫でもあたしは無理だから！！』

『なんで？俺を襲う気？』

『黙れ獣！！それはこっちの台詞だ！！』

『ひどーい』

『とにかく、あたしは嫌よ！！』

『うーん。困ったわねぇ・・・・・あ！ねぇねぇ怜ちゃん！この際だから二人とも結婚させちゃう！？』

『『は？』』

『あら！！それはいい案よきーちゃん！！どう思う！？あなた！！』

『うむ。それだったらいかがわしいことをしても許されるしな』

『うーむ・・・・ちょっと迷うが・・・・仕方がないな』

『あら、やったわ！！よかったわね！！怜ちゃん！！』

『ちょ、ちょっと』

『本当よ！！こんなに可愛い子が娘だなんて嬉しすぎるわ！！！』

『おい、母さん』

『私も、こんなにかっこいい子が息子だなんて嬉しすぎるわ！！！』

『・・・・・・・・』

『ちょっと神城！なんで黙るのよ！！』

『いや、かっこいいって言われたから、別にいいやと思って』

『ちょっと！！』

『じゃあ二人とも結婚しても大丈夫！？』

『ちょっと待ってよ！！私は１７歳でいいかもしれないけど、神城はまだ結婚できないでしょ！？』

『あらあら、それなら心配ないわよ？翔一は一年あっちで留学してたから、一年こっちで遅れちゃったのよ。だから今は１８歳よ？結婚できるわ！』

『えっ』

『残念』

『なんであんたは反抗しねぇんだよこの野郎！』

『グホっ！』

『こらこら、衣！やめなさい！でも式を上げるわけにはいかないわねぇ・・・・』

『そうねぇ。こうなったら婚姻届けだけ出して、終わりにする？』

『それしかないわね。みんなには秘密よ二人とも』

『ほーい』

『・・・・・・・・・・・』←ショックすぎて、なにも言えない

『よかったわ！こんなにも早く娘が結婚するのもちょっとショックだけど、私もこんなに若いのにおばあちゃんになる日が近くなるわ！！』

『『ブッ！！』』

『ちょ、ちょっと、お母さん！！！』

『じゃあ、そういうことだから、婚姻届を出すわよ！！ほらほら、判子(はんこ)押して！！』

『私が押したい！！』

『こんなにも早く娘を嫁に出すのもちょっとショックだ』

『まあまあ、幸治(ゆきじ)俺の子供だからそんなに簡単に衣ちゃんを手放したりしないって』

『わかってるよ。淳之介(じゅんのすけ)なら信頼してるさ』

『え、俺（翔一）じゃないの？』

『もちろん翔一君も信頼してるぞ！！』

『ねぇ、ちょっと』

『元気でな、衣！！こんなにも早くお前を手放すのは何よりも悲し

いが、頑張るんだぞ！！』

『ちょっと！！』

『よし、じゃあな、衣ちゃん、翔一。俺達はいろいろと手続きをするから、ここでちょっと待っててくれ！！』

『ちょっと待ってー！！』

という感じで、二人は親の決めつけで結婚をしてしまったようなものなのだ。

結婚してから、はや二ヶ月。
最初は敵対心むき出しだったが、いつの間にかお互いに堕ちていた二人。
帰ってくる度に翔一にキスされる衣だが、なんだかんだいいながらもいやがっているわけではないのだ。
翔一は自分のことを好いてくれて、自信も翔一のことが好きだ。
何の問題もない。
だが、結婚していることは学校には内緒だ。
戸籍も変わっていない。
高校生同士が結婚なんて、前代未聞な話は聞いたことがない。
親友の沙月でさえ、二人の秘密は知らない。そこまで言ってはいけないことなのだ。

「翔一！カレー！！」
「はいはーい」

そう返しながら、翔一が部屋から出てくる。
カレーを入れている衣に近づくと、彼女に後ろから抱きつく。
危うく衣が皿を落とす所だった。

「――っ！！！しょ、翔一！」
「いいじゃーん。俺は学校でさんざん逃げられた衣が恋しかったんだよ」
「だ、だからって、今、ご、ご飯食べるんだかっ！んっ！！」
後ろに抱きついたまま、後ろに顔を向けてきた衣にすかさずキスをする。
今度は深く、次第に舌が入ってくる。
カレーを入れている途中だった衣は皿を置き、翔一の服の裾を力なく掴む。

「んっ、はっ・・・・・・しょ、しょういーんっ！」

口を離す衣の頭を自分のほうに引き寄せ、そこに固定させると、翔一の深いキスはさらに続く。
いつのまにか衣の身体は翔一のほうに向いていて、抱き合ったままキスしてる状態になってしまった。

「はっ・・・・しょう、いち・・・・んっ」

深いキスが次第に優しくなり、荒い息を立てている衣は翔一の裾を離す。
やっと翔一が自分を離したと思うと、身体を密着させたまま離れようとしない。

「ちょ、ちょっと！」
「いいじゃん別に。俺がここにいてもカレー入れられるっしょ」
「そ、そういう問題じゃないでしょ！」
「いいじゃんいいじゃん。俺お腹すいたんだよ、早く」
「だったら離せ！！」
「嫌だ」
「んっ～！もう！勝手にしろ！！」
「勝手にする」

そういうと、衣がカレーを入れている間ずっと翔一はくっついていた。

第2話　夫婦（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます

第3話　知花家、神城家の一日

「うっ」

まるでものすごい悪臭がするようなものをかいだかのような声が上がる。
そして次の瞬間。

「ギャアアアアアアア！！！！！」

ものすごい悲鳴が響く。
マンションということもあり、その周りの者がなぜその声で起きなかったのかは全くの謎である。

今日は晴天。
いや、晴天というよりも、快晴のほうがいいのかもしれない。雲一つない青い空だった。
しかし、その綺麗な空には似合わない絶叫が広がったのは、高級でもないが、地味でもない綺麗なマンションからだった。

声の持主はベッドから転がりおち、自分のベッドに潜り込んでいる少年を驚いた目で見つめた。
一方の少年は目をこすりながらベッドから転がり落ちた少女を寝ぼけた表情で見つめている。

「な、ななななな何考えてんのよあんたは！！！！！！！！」
「えぇ～・・・・？何がぁ？」
「ご、ごごごご語尾をのばすな！！！ななななんであ、あたしのベッドにいるのか聞いてんのよ！！！！」

「だって一人じゃ寂しかったから、じゃだめ？」
「ふっ」
真っ赤になった衣の顔をみて、楽しそうに語る翔一。
まるで笑い声をあげるような声を上げた衣だと思ったが、
「っざけんなぁ！！！！！！」
ビュン、と足を上げ翔一の頭を狙うが、寝起きということもあり、いまいち迫力がない。
普段の翔一だったら蹴られていた所なのだが、家での翔一は反射神経が学校にいる時の三倍良くなるため、容易に避けることができた。
「っ～！！！」
声にならない声を上げてから、真っ赤なまま衣は部屋から出て行った。
それをクスクス笑いながら翔一が見つめると、彼はもう一度自分の妻のベッドに潜り込んだ。
「しんっじらんない！！何考えてんのよあいつは！！」
ブツブツ言いながらも冷蔵庫から卵を四つだし、食パンも二切れだす。
フライパンを出し、少し火で温めてから牛乳、ニンニク、卵をまぜたものを流し入れる。
半熟になるまでかきまぜ、チーズをのせると、焼いてある食パンに乗せる。
もう一度同じことをし、テーブルに二人分を並べる。

「翔一！！朝ご飯！！！起きろ！！！」

少し不機嫌だということを隠さないように彼を呼ぶと、既に制服姿に着替えた翔一が入ってきた。
衣を見ると、悪戯を考えたような少年の笑みを浮かべ、席に座る。
彼を一睨みしてから、自分も部屋に戻り、制服に着替える。

「うまっ、うまいよこれ。半熟だっていうのがいいねぇ。さっすが衣」

卵をおいしそうに食べている翔一を見ると、衣は溜息をつき、弱い微笑みを浮かべた。
その姿を見るだけで怒りが消える自分は、やっぱり翔一が好きなのだと自覚してしまう。

「当たり前でしょ？あたしが作ったんだから」
「おっ、自信満々だな。ごちそうさま」

食パンの最後の一口を食べてから言うと翔一はせっせと自分の部屋に戻る。
衣も急いで朝ご飯をすますと、食器を流し台にいれ、水に浸す。
朝は洗う時間がないため、必然的に学校から帰ってきてから洗うことにしている。

衣は部屋に入ると、鞄に教科書が入っているのを確かめ、玄関に急ぐ。

「翔一！！先に行ってるからね！！」
「おう！」

二人は一緒に住んでいるが、それがバレてしまう危険性があるため、なるべく一緒には家から出ないようにしている。
いや、学校につく時に一緒でも別に構わないのだが、時々、登校している沙月と会うためできるだけバラバラに登校しているようにしている。
それに、衣は早く学校につくほうで、翔一は遅く学校にくる、というパターンがあるため、一緒にきたら少し不自然になってしまうのである。

「いってきます」
「おう、いってらっしゃい」
「あんたも遅刻だけはやめてね」
「わかってるよ。じゃあ学校でな」
「うん」

それだけ言うと、衣はドアを開けて出て行った。
翔一は、少し名残惜しそうに衣が出て行ったドアを見つめているだけだった。

しばらく通学路を歩いていると、見覚えのある背中が見えた。
沙月だ。

「沙月！」
「ん？あ、衣！はよー」
「おはよう」

衣のためにちょっと沙月が止まる。
ありがとう、と言いながら微笑むと、沙月はなんの前触れもなく衣に抱きついた。

「いやぁ、もう、可愛すぎるよ！その笑顔は！」
「ちょ、ちょっと、沙月！」
「あれ？ちょっと神城君みたいだったね」
「しょ、翔一はもっとうざいよ」
「・・・・・・・あんた本当に毒舌だよね」
「へへっ」

昨日とはちょっと反対な会話を繰り広げていると思ったら、沙月が予想外なことを言う。

「あれ？今日神城君は？」
「え？」

別に翔一と登校するわけではないのだから、そんなこと聞く沙月にちょっと心臓が跳ねる。
もしかして、バレたのではないか。

「な、なんで？」
「いや、だって。一回衣と神城君が一緒に歩いてるのをみたことがあってさぁ。もしかして神城君が衣を待ってたのかなぁと思ったから。今日はいないんだね」
「べ、別に約束してるわけじゃないからね。毎日追い返したら来なくなった」
「へぇ。結構しつこそうなにね」
「う、うん」

なんとも苦しい言い訳だ。
バレたわけではないのだからよかったのだが、こんなことを言うと翔一に対して申し訳ない気持ちになってしまう。

「こっ」
「「え？」」

自分達の声ではない声が聞こえ

「ろもー！！！！！」
「グェ！！」
「わっ、神城君」

て、衣に翔一が抱きついてくる。

前言撤回。
やっぱりこいつに申し訳ないと思うことは絶対にない。

第3話　知花家、神城家の一日（後書き）

なんか、どうしても短くなってしまいますねぇ。
投稿したばっかりなのに、アクセスが１０００人もいて、とっても嬉しいです！！
ありがとうございます！！

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第４話　嫉妬（前書き）

少し遅いですが、あけましておめでとうございます＾＾
更新が遅くなってごめんなさいｏｒｚ

第４話　嫉妬

「あんたは！！」
「グホっ」
「何を！！」
「グハっ」
「考えて！！」
「ウグホっ」
「るんだ！！」
「グハァ」
「よ！！」
「ムグっ」
「この！！」
「アグフぅ」
「バカ！！」
「グヘェ！！」

最後の一発で翔一が飛ぶ。
先程の家では見られない程の反射神経の悪さにいつもながら少し驚く衣だが、今はそれどころではない。
校庭の上を跳ねるように飛んだ翔一は、ムクリ、と起き上がると、痛ぇ、と言いながらフラフラと衣の側へもう一度歩み寄る。

「ひ、酷い・・・・今のは痛い」
「自業自得だアホ！何考えてんのよ！」
「い、いつもハニーのことだけ―グホォ」
「ハニーって呼ぶなって言ってるだろうが！！！」

ヨロヨロ歩く翔一の腹をもう一発殴ると、ふん、と踵を返し、衣が

心配そうに翔一を覗き込む沙月を置いて、さっさと教室のほうに歩いていく。
沙月はそんな衣の背中を苦笑を浮かべながら見つめると、半殺し状態の翔一の目を見た。

「神城君？大丈夫？息してる？」
「ハァ、ハァ、あいつ、容赦ねぇ・・・・」
「あ、生きてるね。大丈夫そうだね。よし。じゃあ、あたしは戻るからまたねぇ」
「ちょ、見捨てんの！？」
「えぇ、だって自業自得じゃない？」
「ひ、酷い・・・・」
「じゃあねぇ、バーイ」
「う、ぐっ」

大袈裟に校庭に倒れると、周りの野次馬は『はぁ、またか』などと言いながら彼を通り過ぎる。
衣と翔一は二年の中だけではなく、一年、三年の中でも公認のカップルと知られている。
二人は、いや、一人だけは否定しているが、もう一人はそういうことを言われて嬉しいみたいだ。

因みに、衣が怒っているのは、翔一が今日の朝に抱きついてきたからだけではなく、学校についてからもベッタリで離れようとしないからである。
最初のうちは冷静さを保ち、耐えていたのだが周りの視線をどうしても感じてしまったため、離れるように言ったのだ。
しかし、どうしても離れててくれなくて、怒りと恥ずかしさで殴ってしまったのである。
周りのものはいつもの痴話喧嘩と見て、あまり気に留めていなかっ

た。

昼食時間。
衣と沙月は弁当を食べながら、朝のことについて話していた。
二人ともかなりの美少女ということもあり、会話に入るものはあまりいない。
いや、確かに衣は可愛いが、性格は乱暴で言いよってくる男子には容赦なしに殴りつけたりするため、違う意味で彼女に近づくものはあまりいない。
逆に、沙月は綺麗に分類される美少女で、その美貌に憧れる人は少なくない。
遠巻きに見る人が多いため、近づく人があまりいない。

「疲れた・・・・本当に。翔一が違うクラスで助かった・・・」
「確かにね。クラスまで神城君と一緒だったら大変だったわね」
「うん・・・・」
「それにしても、二人って本当に仲がいいわよね。恋人というよりも、喧嘩友達と恋人を合わせたような感じ。うぅん、なんていうか、素直じゃない夫婦みたいな？」
「ブッ！！ゲホゲホッ！ウホッ、ゲホッ！」

丁度水筒から水を飲んでいた衣は最もな指摘に思わず水を吹いた。
それを見た沙月は、避けるように少し椅子を引く。

「ちょ、汚い！！何動揺してんのよ！」
「さ、沙月が変なこと言うからでしょ！！」
「もっと言ってやってよ村咲（むらさき）さん」

「ブッ！！」
「うわっ、汚いっつの！ちょっと神城君！？なんでいるのよ、今昼食中よっ！」

予想外の人の声に衣がもう一度水を吹き、沙月がもっと椅子を引く。ゴホゴホと咳き込んでいる衣を放っておいて、沙月が驚く。

「え？先生にプリント届けてって頼まれたから」
「だからってここに寄ることないだろこの下衆」
「うわ、立ち直り早っ」
「ふざけんな。あたしは朝のことで機嫌が悪いんだよ下衆」
「うぅぅ」
「とっとと帰りなよ。先生に怒られるよ」
「そんなこと―」
「おい神城！用が終わったならさっさと出てけ。夫婦喧嘩は後でしろ」
「先生！！」
「ほーい」

因みに先生達にも衣と翔一は公認のカップルとして知られている。二人に面と向かって言う先生と言わない先生がいるが、衣達の担任、浅海順平（あさみじゅんぺい）はクラスメートみたいに接することができるような人であるため、そういうことをすぐに言う。
学年の先生の中でも生徒にとても人気があり、優しく面白いが、しっかりと生徒指導もしている。

「あ、ころもっ。見てみて！神城君が呼び出されてるよ！」

「え？」

昼休み。
沙月と話していたらクラスメートの舞（まい）が衣を呼ぶ。
沙月と目を合わせてから、二人で急いでドアに寄ると、確かに翔一が女子に話しかけられていた。

翔一は確かに性格が軽いが、決して悪いわけではなく、顔もいいため、一応女子にそこそこの人気がある。
衣も告白されたことがないわけではないのだが、翔一に比べたら少ない方だろう。

「いいの？衣」
「な、何が？」

沙月が横からニヤニヤしながら衣に聞いてくる。
その意図はわかっていたのだが、わざと知らない振りをする。
こういう場合はこうするしかないだろう。

「あれはどう見ても神城君、告白されるところよ？」
「べ、別に。あたしには関係ないでしょ」
「へいへい」

沙月がそんなこと言いながらも、衣は確かに少しもやもやしていた。
自分は翔一と結婚しているのだから、彼は断る。
それはわかりきっていることなのだが、それでも少し不安がよぎる。
自分は彼を信用していないのだと思ってしまい、衣は少し俯く。

「――――・・・・・・俺は・・・・――――・・・・から」
「・・・・・・――――それは・・・・――――・・・・・・――――！？」

「――・・・・・・ない・・・――・・・・――くれ」

人がたくさんいるにも関わらず、翔一を呼び出した少女は彼を問いつめている。
ここからではなんの会話をしているのかはわからず、所々しか聞こえないが、翔一の表情と少女の表情からして、彼は断っているのだろう。
それを見て、衣は少し安堵の溜息をついた。
聞こえないようにしたつもりだったのだが、隣に立っていた沙月がニヤリと笑う。

「何？ほっとしてんの？」
「は、はぁ！？な、何言ってんの！そんなわけないでしょ！」
「うわぁ、そこを必死に否定してる所からしてその言葉は嘘だね。嘘。素直じゃないなぁ」
「るっさい」

急いで目を反らしてもう一度翔一の方を見ると、バチッと目が合う。
目を見開くと、彼は口の端を上げ、何かを企んだように彼女に手を振る。
それを見ていた人達が一斉に衣に視線を向ける。

「――・・・・・・っ！！あのバカっ！」

恥ずかしさで顔を赤くした衣を見て、翔一に問いつめていた少女の顔に憎悪が露になる。

「まっ、俺にはもう衣という人がいるから、他の人と付き合うなんて考えられない。ごめんね」
「で、でもっ、知花さんは翔一君のことが好きじゃないんでしょ！

？」
「は？馴れ馴れしく翔一君なんて呼んでんじゃねぇよ。みんなは知らなくても衣は俺のことが好きだから。人の恋愛に口出しすんじゃねぇよ」
「っ！」

普段の彼との豹変っぷりに少女は目を見開き、言葉を失う。
それを見て、翔一は笑顔のまま真っ赤の衣に向かった。

第４話　嫉妬（後書き）

今回はいろんな嫉妬が出ました。
たいした嫉妬じゃなくてごめんなさい・・・・・

再び、あけましておめでとうございます。
親戚の家に行っていてパソコンがなかったものですから、更新ができませんでした・・・・・
続きを待ってくれていた皆様、申し訳ありませんｏｒｚ

今年もみなさんにとっていい年になりますように・・・・

ここまで読んでくれてありがとうございます

第5話　女の戦い

世の中にはいろいろな人がいる。
女性にも、男性にも。
女性はかっこいい男性に弱いというイメージを受けるが、そんなのは漫画やドラマにしかない。
そもそもかっこいいという基準や好みは人それぞれであるからだ。
大体の女性は、幼い頃は自分のスタイルや髪型は気にしない。
周りの目などは気にしない。
しかし、中学、高校になると、周りの人にどう見られているのかきになり、男性にもできるかぎり可愛いと思ってもらいたい。

男性も同じ。
美人な女性を見ると、目をハートにするわけではない。
それもまた、漫画やドラマ限定だ。
そして、幼い頃はやんちゃでうるさく、周りの人には迷惑ばかりかけている少年が、中学、高校に上がると、やはり周りの目を気にし、女性にかっこいいと思ってもらいたい。
性格も、すこしかっこつけて女性に高く評価されたいが、メールなど見ると彼らは本当はそんな性格ではないとすぐわかる。

性格も、女性、男性で数えきれないぐらいで、細かく説明するときりがない。
単純に言えば、小悪魔的、冷たい、天然、明るい、クール。
様々な性格がある。
その中に嫉妬深いという性格もあるだろうか？

なぜなら、一人の少女はその嫉妬深い性格の少女と対面しているからだ。

「あんたさ。翔一君の何なの？」
「えぇと・・・・」

彼女は先程翔一に告白をしていた、可愛らしい少女。
衣よりは一歳年上で、翔一とは同い年の三年生である。
しかし、身長は衣よりは十センチぐらいは小さく、おそらく１５５センチくらいだろう。
衣は女子の中では背は高いほうだ。
しかし、先輩を上から見下ろすというのも少し抵抗を覚えたため、少し自分と彼女の間に距離をとっている。
そうしたほうがおそらく先輩も楽だろう。

今の状況はおそらく説明しなくても分かるだろう。
先輩をあっさりと振った翔一が衣のほうに来てしばらく話していたのだが、先輩の視線があまりのも痛かったため、彼を教室に追い返し、衣も自分の教室に戻ったのである。
しかし、先輩は衣を呼び出し、今は廊下の真ん中で口論している。
どうやら彼女は周りの人に注目されるのが好きみたいで、わざわざ人が多い所を選ぶのだ。それとも、ただたんに周りの人を気にしないだけかもしれないが。

まあ、衣も翔一のことで問いつめられている、漫画的な展開にいるのである。

「なんなんでしょうかねぇ・・・・」

「ふざけないでよっ！」
曖昧に返事する衣に先輩が叫ぶ。
名前も知らない先輩に『ふざけないでよっ！』と叫ばれても少し困るのだが。

「ふざけてません。事実、あたし自身もあいつの何なのかわかりませんから」
「だったらなんで翔一君はあんたが彼のことが好きだって言うのっ！？」
「えっ！？言ったんですか！？」
「言ったわよっ！！！」

この先輩は言葉の最後に『っ』がよく来る。
というか翔一。
そんなことばらしてんじゃねぇよこの野郎。

「ああ、まあ・・・・翔一がそう言ったってことは、そうですねぇ・・・・確かに私は翔一が好きですよ―」

パァン！！

乾いた音がし、廊下で話していた人達の注目が一気に一つの所に向いた。
そこには涙目で掌を押さえている先輩と、左の頬を押さえている衣の姿がある。

「ったぁ・・・・」
「ふざけないでって言ってるでしょっ！？何なのよあんたはっ！！なんで翔一君のことをそう思ってるくせにそうじゃない振りをする

のよっ！！！」

もう既に涙を流している先輩に、衣は堪忍袋の糸が切れたような気がした。

左の頬を押さえたまま、衣は涙を流している先輩を見つめた。

「ふざけてません、って何回言えばわかるんでしょうか。非常に物わかりが悪いみたいですね、先輩は。私は翔一のことが好きではないと言った覚えは一度もありません。そういう素振りは見せましたが理由があるんです。先輩にはわからない理由があるんです。大体、もう振られた人にそんなこと言われたくない―」

パァァン！！！

もう一度乾いた音がし、より強く衣の左の頬を叩いた先輩が彼女を睨みつけた。

今ので衣は左の頬を両手で押さえ、苦しそうに顔を歪める。

頬が焼けたように痛い。

「ころもっ！！」

衣のことを心配して、丁度三階に上がって来た沙月が急いで彼女のほうに駆けつける。

先輩は衣を三年の廊下に連れてきたため、衣の知り合いはいない。

いたら、もう既に一発目で先輩を止めているだろう。

沙月は急いで衣の側へ駆け寄ると、先輩を睨みつける。

後から来た舞達も急いで衣達の側へ寄る。

「先輩！！いい加減にしてください！！あなたに衣を傷つける理由

なんてないでしょう！？」
「黙っててよっ！！あんた達は関係ないじゃないっ！！」

「沙月」

はっ、と沙月達が衣を見つめる。

「衣！大丈夫！？早く保健室にいかないと！」
「大丈夫」
「大丈夫なわけないでしょう！？めちゃくちゃ赤いわよ！？」
「これは、本当に私と先輩の問題だから」
「衣！！」

そう。
これは、本当に衣と先輩の問題。
沙月達を巻き込むわけにはいかない。

「本当に大丈夫だから」
「でもっ！」
「大丈夫だから！」
「――・・・っ！」

強く言い張る衣に、少し不満な顔をしながらも沙月達は壁に寄った。
涙を流したままの先輩を見つめると、衣は口を開けた。

「先輩。あなたは私と翔一の関係に口出しする権利はあるんですか？それとも、ただたんに翔一と仲がいい私に妬いてるんですか？」
「―・・・・っ！！まだ言うのっ！？」
「違うんですか？」
「わ、私はただたんに翔一君はすごくあなたのことを好いているの

に、あなたがなんでもない見たいな態度で接するから頭に来るのよっ！！」
「でも、だからと言って私が翔一とベタベタしたら先輩はヤキモチを妬くでしょう？」
「なっ！！調子に乗らないでっ！！」
「――っ！！」
「ころもっ―」

パシっ

「俺を馴れ馴れしく『翔一君』って呼ぶなって言っただろ？」
手を振り上げた先輩を見て、沙月達が衣の名を呼ぶが、その前に誰かの手が先輩の手首を掴んだ。
直後放された低い声は、とても聞き覚えのある声だった。

「しょう、いち・・・・」
「大丈夫か？」
「う、うん」
「聞いた俺がバカだった。そんなわけないだろ。頬がめちゃくちゃ赤いぞ？」

そう言いながら翔一が衣の頬に手を添える。
ピクッ、と思わず痛みに身体が跳ねる。

「痛いんじゃねぇかよ・・・」
「そりゃ痛いよ」
「何回叩かれたんだ？」
「え？」
「一回じゃねぇだろ、これは」

「いや、その、えと」
「・・・・・・・」
躊躇っている衣をよそに、翔一が自分の背後にいる先輩を睨みつける。
ビクっ、と彼女の身体が跳ねる。
「何回だ」
「え？」
「何回叩いたのかって聞いてんだよ」
普段の翔一の人格ではない態度に沙月達も驚いて目を見開いている、騒ぎを見ていた三年生も聞きつけた二年生もいつのまにか三人を囲んでいる。
「に、に、かい・・・」
「二回？」
翔一が怒りに満ちた目で彼女を睨みつけるて、先輩は冷や汗をかきながら、本当に小さく頷くと、翔一の目が鋭くなる。
「ひゃっ。いや、これは、だって、その・・・」
「言い訳は聞きたくない。二回叩いたのには変わりない。衣。保健室いくぞ」
「へ？あ、え？う、うん」
怯えて小さくなっている先輩を放っておいて、彼女を一睨みしてから、翔一は保健室に衣を連れて行った。

ピクッ、と赤い頬に先生の手が触れて、衣の体が跳ねた。

「うーん・・・・これは痛そうねぇ・・・・後で倉野(くらの)さんにじっくりと話を聞かないとだめねぇ・・・・思いっきり叩かれたの？」

「うん・・・まあね・・・」

「あらあら。二回でこんなにも腫れるなんて倉野さんも意外と力があるのね」

「先生。のんびり話してないで治療してやってよ」

「はいはい。わかってるわよ」

保健の先生、浅海順子(あさみじゅんこ)、通称、アサちゃんは衣達の担任の浅海順平の双子の妹であり、二人の夢である教師に、二人ともなったのである。

それが同じ学校というのは意図的なのか偶然なのかわからないが。

おっとりとした性格で、時折生徒と話し込んで、逆に手当をするのを忘れることがある。

『天然アサちゃん』と呼ばれることもある。

倉野というのは、先程衣と言い合っていた先輩で、どうやら保健室にはよく通っているために、順子とは結構の顔見知りらしい。

「ちょっと待ってね。今氷を出すから」

順子が冷蔵庫から氷を出すと、それに布を巻き付け、衣に渡す。

恐る恐る衣が頬に氷をあてると、一瞬痛みで跳ねるが、翔一が手を添えると、少し顔を歪ませるが我慢して目をつむる。

それを見て、あらあら、と順子が口に手を添える。

「本当に衣ちゃんと翔一君は仲がいいわよねぇ。まあ当たり前か。結婚してるんだから。うふふ」
「アサちゃん。そういうことを大声で言わないで」
「はぁい」

そう。
順子は衣と翔一の関係を知っている数少ない人物なのである。
しかし、順子は知っているのに順平が知らないのには、訳がある。
順子は衣の母親、菊子（きくこ）の昔からの知り合いであり、衣と翔一の結婚話しも一番に話した人物だったのだ。が、双子だというのは分かっていながらも、順子は順平を菊子に紹介したことはなく、菊子と順平は全くの赤の他人といっていい。
順平が衣のクラスの担任だということも知っていたので、それも理由だったのかもしれない。

「ここでしばらく冷やしているのよ？私は少し用があるから出てくけど・・・翔一君は戻ったほうがいいと思うのよねぇ・・・・」
「俺はここにいる。衣を一人にして置けないし」
「あらぁ、ラブラブで羨ましいわ」
「アサちゃん！」
「にしても普段の性格と家での性格のギャップがまたかっこいいのよねぇ。私も惚れてしまうぐらいだわ！」
「止めろよ先生。衣がヤキモチを妬くだろ―うぐっ」
「誰がヤキモチだ下衆」
「あら、性格が変わっても反射神経は変わらないのね」

うふふ、と笑ってから順子が保健室から出て行く。
それを無言のまま、二人はドアを見つめていた。

「なんか疲れた」
「そうか？俺は結構先生とは気が合うと思うんだよな」
「そんなのあんただけよ」
「そっか・・・・」

最後に少し元気がなくなった所を見て衣がドアから翔一に視線を移す。
少し俯いて、元気なさそうにしている。

「ん？どうしたのよ？」
「衣」
「ん？」
「ごめん」

いきなりの謝罪の言葉に衣が首を傾げる。

「何？どうしたのよ急に」
「さっき。俺のせいで叩かれただろ？」

心配そうな顔で再び翔一が衣の頬に手を添える。
ああそっか、と衣が納得し、にっこりと微笑む。

「大丈夫よこのくらい。翔一のせいじゃないから、ね？」
「・・・・・・・・・」
「そんな暗い顔しないで！あたしはこの通りピンピンしてるから」

それでも不服そうな顔をしている翔一を見て、衣が苦笑を浮かべる。

「もう！大丈夫だから！」
「・・・・・・・・・」

「翔一！」
「じゃあキスして」
「はぁ！？」

翔一のいきなりの言葉に衣の顔が赤くなる。

「なんでよ！」
「だってぇ、俺衣からキスされたことないもん」
「関係ないでしょ！何開き直ってんのよ！」
「お願い。キスしたら許してあげるから」
「なんであたしがあんたに許されないといけないのよ。逆でしょ」
「だって衣の要望なにもないんだもん。それとも俺のキスが欲しい？」
「えっ！？・・・・・・・・ほ、しい、けど・・・・」
「んじゃそれでチャラね」
「ちょ、んっ！」

そのまま翔一が顔を近づけてきたと思うと、唇が塞がれ、衣は翔一にキスをされていた。
学校ではあまりこういうことがないからか、いつもの衣なら拒んでいる所なのだが、今回は仕方がないということで、彼を許すことにした。

第5話　女の戦い（後書き）

ちょっと長くなりましたね。
投稿遅れてごめんなさい。

アクセス数がとても多くてとても嬉しいです！！
感想・評価よろしくお願いします。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第6話　頭脳明晰でも風邪をひく

バカは風邪を引かないというけれど、それってつまり頭のいい人は風邪をよくひくということなのだろうか？
しかし、ここ二ヶ月で翔一が風邪を引いたことは一度もない。
でも、彼はバカではない。というか、全く反対の学年首席。

そして、今。
風邪を引いている。

「３８度６分・・・・・・すごい熱じゃない！」
「なんでだろぉ、ゴホゴホっ」
「人の布団に潜り込んだ罰よ。ほら、氷枕」
「さんきゅぅ」

今日も今日とて、起きたら翔一が自分の布団に潜り込んでいて、彼に蹴りを入れたら、珍しく彼が避けなかったのである。
そのまま蹴りは顔にクリーンヒット。
バタンと倒れて、衣が慌てて起こそうとしたら。
はて？身体が熱いではないか。
急いで彼の額に触ると、ものすごく熱く、衣が彼を寝かせ、氷枕をとってくる間に彼に温度を計らせ、会話に戻る。

しかし、ここまで弱っている翔一は見たことがない。
ここにいて看病して上げたいのだが、二人が一緒に休んだら多分、いや、絶対に怪しまれる。
ただでさえ昨日の事件で恋人として全員に認識されてしまっているため、先生も黙ってはいないだろう。

「どうしよう・・・・」
「だ、ゴホゴホ、大丈夫。ころもはがっこー行ったほーがいー・・・・ゴホッ」
「だ、大丈夫じゃないでしょ！もう、本当にどうしよう・・・・でも、二人で休んだら怪しまれるよね・・・・」
「だから、だいじょうぶぅ・・・・」
「いやいやいや。全っ然説得力ないから」
「じゃー、休むの？」
「うっ・・・・まあ、そういうわけにもいかないんだよねぇ・・・・」
「ほんとに、へいきだから。いきな」
「うぅぅー・・・・・ごめんね！できるだけ早く帰ってくるから」
「ああ、まってる」

衣はパンと両手を合わせて謝ると、濡れたタオルとおけを置き、少し心配そうに翔一を見てから家から出て行く。

「くそ・・・・」

くしゃ、と翔一は額に手をやった。

「ころもっ！！」

学校について早々、沙月が衣に飛びついた。
油断していたため少し足がぐらついたが、なんとく踏ん張る。

「さ、沙月。おはよー」
「おはよー。じゃないわよ！昨日のこと！大丈夫！？ああ、まだ赤いじゃない！！」
「そりゃ一晩で腫れがひくわけないでしょ」
「あら、心配してる人に向かって失礼ね！あれ？神城君は？」
「どうして沙月の頭の中にはあたしが翔一と来るっていう方式がインプットされてんの？」
「いや、そうじゃなくて―まあ、それもあるけど―今の時間って普段神城君が来る時間でしょ？」
「え？」

慌てて時計に目をやると、確かにチャイムがなる五分前。
衣は普段はチャイムがなる二十分前には来ていて、翔一が五分前に来る。
翔一の看病をしていたから、ずいぶんと時間をくっていたらしい。

「あたし、そんなに遅かったの？今日」
「そうよ。どうしたの？」
「いや、寝坊したんだけど、そこまで遅いとは思わなかった」
「寝坊？珍しいわね」
「うん」

すんなりと嘘が出てきて、少し罪悪感を覚えたが、これは仕方のないことなのだ。
衣が席につくと、その前の席に沙月が座る。

「で？どうなの？神城君」

なぜか、異様に翔一のことについて聞いてくる。
それも、ニヤニヤしながら。

「・・・・・・・・・・風邪なんだって」
「ほぉ？それはどこで聞いたのよ？」
「え？め、メールが気たのよ。朝から」
「わざわざ？相変わらず『衣命』ね」
「うん」
「じゃあ見せて？」
「えっ？」
「メール見せて」
「どうしてよ」
「証拠、証拠」
「いらないでしょ？別に」
「じゃあ何？実はメールなんて来てないって言うの？」
「わ、わかったわよ」

なぜか、今日は異様に沙月が翔一のことについて追求してくる。
まあ、昨日もあんなことがあったのだから無理はないが。

衣は急いで鞄の中を探り、携帯を取り出す。
もちろん、翔一からのメールはないはず―

「えっ？」

思わず口から声が出た。
受信ボックスに新着メールがある。

開けてみると。

Ｆｒｍ　翔一

Ｓｕｂ　ご褒美くれ

『俺、今日風邪だから学校休むわ。
村咲さんにヨロシク☆』

うっそーん。

こいつ準備よすぎだろ。
ってか最後の星マークきもっ。しかも『よろしく』がカタカナって何なのよ。

とか思いながら、衣は沙月にメールを見せた。
沙月は少し怪訝そうな顔をしながら、そう、と呟いて、隣の席に腰をおろす。

「なぁんだ。本当だったのね。つまんないわ。ってかなんで私によろしくなの？」
「さぁ？って、何を想像していたんだお前は」
「え？うーんと、実は衣と神城君は同居生活を送っていて、それで今日の朝神城君が風邪を引いていて、その看病をしていたから遅刻して、なぜ風邪をひいているのか分かるの？って私が聞いて、動揺する衣。みたいな？」
限りなく現実に近い発想だ。
「なんだそりゃ。妄想もいい加減にしなよ。ってか返信、返信・・・・」

Ｔｏ　翔一

Ｓｕｂ　誰がやるか

『よく想定内だったわね。助かったわ。
氷枕が冷蔵庫にあと二つ入ってるから
頑張って起きてね』

「送信・・・」
「っと、チャイムだぁ。一時間目自習でよかったわね」
「そうね」

今日は一時間目が数学のはずだったんだが、数学の先生が体調不良のため自習になったのだ。
まあ、ありがたいと言えばありがたいのだが、その分、自習に配られる数学プリントを全部翔一に持って帰らないといけないのだ。
面倒くさい。

「じゃあ、プリント配るわよー」

次々とプリントが回ってくる。
衣は一番後ろのため、前の人が机に置いてくれてとても助かる。
隣にいる沙月もそうだが。

ブーブーブー

「げっ」
「ちょ、衣、やばいって！みっきーに没収されるよ」

「わかってる！」

みっきーと言うのは、先程プリントを配った幹原和花子（みきはら わかこ）のこと。
順平と同じく、生徒みたいに接することのできる先生だが、携帯やゲームなどやってるところを見られると、速攻没収。
そしてトイレ掃除二週間。

衣は幹原が背を向いたのを見て、急いで携帯を開ける。
新着メール。二件。
二件！？

Ｆｒｍ　翔一

Ｓｕｂ　ひどい

『へっへぇん。すごいだろ。ってか、俺今これ
打つのも精一杯なのに、冷蔵庫までとりに
いけと？酷いなぁ。
あ、でも、キスしてくれたら許す』

ピシっ。

「えっ。ちょ、衣？鉛筆にひびが入ったよ？」

二件目。
正直見たくはない衣だったのだが、ここは仕方なく見ることにした。
返信をしないと、いろいろうるさいのだ。

Ｆｒｍ　翔一

Ｓｕｂ　しないとばらしちゃうぞ

『そうだそうだ。キスしたら風邪がうつって
みんなに怪しまれるから、額だけでいいよ。
あ、でもどうせならキスだけじゃ嫌だな。
ニヤニヤ』

ボキッ。

「えっ！ちょ、ちょっと、衣！？鉛筆が折れたわよ！」

Ｔｏ　翔一

Ｓｕｂ　ばらして見ろやコラ

『殺す』

第6話　頭脳明晰でも風邪をひく（後書き）

バカだからって風邪をひかないってのはないと思うんですよね。
あ、でも私もバカですが、風邪をひかないなぁ、そう言われてみれば・・・

ここまで読んでくれてありがとうございます

第7話　文化祭準備（前書き）

投稿遅れてごめんなさい

第7話　文化祭準備

もうすぐ文化祭。
衣達の高校の文化祭は学校の名前、愁桜学園からとって『愁桜際(しゅうおうさい)』という名前の文化祭で一年の中でも最も生徒達がせっせと働く時間である。
文化祭は実際の日よりも準備している期間のほうが楽しいが、本当にその通りであると衣は思っていた。
といっても、今は出し物を決めているだけなのだが。

さて。
翔一の病気は風邪で、二日間寝ていたらすっかり治ってしまい、今もおそらく隣のクラスで文化祭の出し物を決めているだろう。
衣が家にいた二日間で翔一の看病をしなかったのは言うまでもない。

「じゃあ多数決で決めるわよ！」
『おう！！かかってこいやぁ！！』
『っしゃー！』
『気合い入れてくぜー！！』

衣は黒板に書いてある出し物のリストを手でばんばんと叩いてから、勢い良くチョークを手に持った。
衣は正義感もあり、リーダーシップもあるということで、勝手に全員に実行委員の義務をきせられてしまった。もう一人の実行委員である桐本智哉(きりもと ともや)は元々こういう行事が好きなので、彼も実行委員の仕事を押し付けられたのだ。

「じゃあしっかりと票を頼むわよ、智哉君」
「おう。任せとけ。よっしゃー！一人二票だ！！わかったかぁ！」

『ガッテン承知だぜ智哉ぁ！！！』
「男子張り切り過ぎ！絶対メイド喫茶にするつもりでしょ！」
「ったりめぇだろ！」
『変態！！』

妙なテンションで盛り上がるみんなは放っておいて、桐本は拡声器を手をに持って大声で叫んだ。

「お化け屋敷がいい人！！！」

何人かの手がちらほらと上がる。

「・・・・・・・・・はい、１０人！」
「１０人ね・・・・・・いいよ！次！」

衣は黒板に『正』の字を二つ書くと、振り向いて桐本に指示を出す。
彼は頷くと、次々と候補を言っていく。

「たこ焼き屋がいい人！！６人！！」
「オーケー！６人ね！」
「焼きそば屋！！５人！」
「了解！次！」
「普通の喫茶店！！おおっと！女子が多いねぇ！えぇぇと、１３人！！」
「女子全員じゃん。あたしもいれて１４人！次！」
「ゲームコーナー！１６人！！」
「了解、次！」
「おおっと！！来ました来ました！！メイド喫茶がいい人！！！多い！多いです！！なんと男子全員、俺も入れて２３人！！」
『最低！！！』

『変態！！』
『信じらんない！！』
「めちゃめちゃブーイングくらってるわよ」
衣は黒板に『正』を四個と三画を書いてから、呆れた目で興奮している桐本に言う。
彼は嬉しそうに笑うと衣の肩にポンと手をのせる。

「ドンマイ。このクラスは男子のほうが割合が多いから、必然的にメイド喫茶は決まり。残念だったな」
「うっわムカつく。ちょっとみんな！！メイド喫茶で決まりだけど―」
『えええぇ！？ちょっと衣！？オーケーすんの！？』
『なんでよ！！こんな変態達と一緒にメイド喫茶なんてやりたくないわよ！！』
「いいから聞いて！！」

衣が叫ぶとブーイングも少し止み、男子は聞く耳をたてた。
隣に立っている桐本も興味深そうに衣の言葉に耳を向けている。

「仕方がないからメイド喫茶で決まりだけど、男子も女子と全く同じ勤務時間で決まり！！サボりを見つけたらメイド喫茶は速攻普通の喫茶店になるわよ！！いいわね！！」
『はぁ！？ふざけんな知花！！』
「じゃあメイド喫茶はやめにする？」
「はいはい。知花に逆らってもいいことねぇよ！そのルールにそって実行！サボりを見つけたら準備中でもメイド喫茶は取りやめになるぞ！！」
『桐本までそんなこと言うのかよ！』
「それが一番公平なやり方だろ？異議があるひとー！」

そこまで言われると男子も黙ってしまう。
女子は衣の提案で心底嬉しそうだ。
これならメイド喫茶も納得行ける。
そんなこんなで２―Ｂの出し物はメイド喫茶に決まりになった。

「へぇ。２―Ｂの出し物はメイド喫茶なんだぁ。ん？ってことはハニーもメイド！？ウグッ！」
「鼻から息を出すな。何興奮してるんだこの変態下衆野郎」
「あれ？バージョンアップ？」

今は昼休み。
衣は翔一を誘って、今日起こったことを話すと、彼は早速飛びかかってきて衣の姿を見に来ると言い出したのだ。
見に来てもいいのだから衣も口に出したのだが、こいつが変態だということを忘れていた。

「俺は変態じゃねぇよ。ただ『メイド』っていう響きに興奮を覚えてるだけだ」
「そういうのを変態っていうのよバカ。２Ｃは何やんの？」
「俺達は基本のお化け屋敷だよ。ま、でも楽しそうだから来てよ」
「うん。沙月と一緒に行くわ」
「最優秀賞を取るぜ！！」
「ああ、それ狙いなのね。あたし達はただたんに男子が変態だからそういうのは狙ってないわ」

「へぇ。でもどうせなら最優秀賞狙ったほうがいいぜ？愁桜は別にメイド喫茶だからって評価を厳しくしたりすわけじゃ―」

「知花！！」

翔一の言葉を遮って、衣の名が呼ばれる。
二人で振り向くと、桐本が紙を持って二人の方に近寄ってきている。
裏庭にいたということもあるのか、息切れているということは結構探したというわけだ。

「智哉君！どうしたの！？」
「いや、ちょっと用事が、って、あ」

桐本は紙をヒラヒラと振ると、衣の隣にいる不機嫌そうな翔一を目に入れると少し言葉が詰まる。
二人の間に視線を行き来させてから、口を恐る恐る開ける。

「えっと．．．．お邪魔だった？」
「え？」

隣にいる翔一を指しているのだと気づくと、衣は大丈夫大丈夫と身体の前に手を振る。
翔一の視線が鋭くなる。
ここまでくるともうわかると思うが、翔一は非常に独占欲が強い。
衣のことを誰よりも大切にしているが、衣はそんな彼の気持ちに気づいてはいない。もちろん彼女も翔一のことは好きだが、そこまで独占欲は強くない。

「そ、そう？」
「うん。大丈夫よ。それで用事って何かな？」

「ああ。えっと、今日放課後に実行委員で今後の予定とかを決めるから、放課後に生徒会議室に集まってほしいって」
「えぇ？実行委員ってそんなことまでするの？面倒くさいなぁ」
「まあそう言わず。放課後っていっても会議は三時からだから、よろしくな」
「うん。ありがとう」

ヒラヒラと手を振ると隣から鋭い視線を感じたため、横を向くと自分を睨みつけている翔一がいた。翔一は元々睨んだり怒ったりすると怖い人間だからか、衣は少し目を見開いた。

「ど、どうしたの？」
「・・・・・・・別に」
「いやいや、明らかに怒ってるでしょ―んっ！？」

少し心配そうに彼を覗き込むと、一気に彼の顔が近づいて唇が塞がれていた。
彼は公衆の面前ではこういうことはしない人間だからか、油断していた分、今何が起こっているのか理解するまでに時間がかかってしまった。
しかし、理解すると衣の顔は真っ赤になり、必死に翔一の身体を押した。
もちろん敵うわけもなく、彼はそのまま彼女に激しい口づけを続けた。
いつの間にか回りの人の注目の的になっており、衣は自分の顔がますます赤くなっていくのが分かる。

やっとのことで自分の頭を離してくれた翔一は、真っ赤になって自分を睨みつけている衣を見下ろした。
彼女がフルフルと恥ずかしさで震えているのが分かる。

「こんの・・・・・大バカ野郎！！！！！」

叫びながら翔一の顔に綺麗に『シャイニング・ウィザード』（蹴り）をくらわせると、猛スピードで校舎の中へと走っていった。

その騒ぎが次の一時間で学校中に知られてしまったのは、言うまでもない。

第7話　文化祭準備（後書き）

こんにちは。
投稿が遅れてしまって誠に申し訳ございません。
インフルエンザにかかってしまいまして、しばらく寝込んでおりました。
ああ、苦しかった・・・・
ここまで読んでくれてありがとうございます

第8話　翔一の嫉妬

彼の様子はずっと変だった。
昨日もおととといも、彼女が桐本と話していると二人をすぐに引き離す。おととい会議のあった日も、彼は衣が終わるまで待っていた。
そして生徒会議室から出てきた否や、彼は彼女の腕をひっぱり、無言のまま家に帰った。
まあ衣もバカではないのだから、これは彼の子供っぽい嫉妬が原因だとわかりきっていた。
こんなにも素直に嫉妬するとは流石に思わなかったが。

「・・・・・・あのさぁ・・・・・・・」
「何」

『知花』の札が張ってある家の中から少し高い女性の声がする。
それに対して、いかにも『不機嫌です』と言っているような声が同じ部屋から響く。

いや、いかがわしいことをしているわけではなく、ただ単に旦那が妻のベッドに勝手に潜り込んだだけである。
妻は断じて彼のこういう行為を嫌っている。

「・・・・・・そんなに不機嫌になることもないでしょ」
「じゃあ桐本とベタベタすんのやめろよ」

昨日から何百回も聞いている台詞に衣は布団を思いっきり蹴り飛ばした。

「してないわよっ！！何子供っぽい嫉妬なんてしてんのよ！！」

「お前は俺の妻だ。何が悪い」
「開き直ってんじゃねぇ！！！」

そう叫びながら彼の頭を思いっきり叩くと、そのままパジャマ姿で部屋から出た。

「ってぇ・・・・」

珍しく家で殴られた彼、翔一は彼女、衣が出て行ったドアを不機嫌そうに見つめている。

彼の様子が変わったのは、明らかに二人でお昼を食べていたときに、桐本が現れた時だろう。そういえば、衣が桐本と話していた時なぜか隣からちくちくと視線を感じていた。
ただの気のせいだと思い気に留めていなかったが、あれは翔一が自分と桐本を見て睨んでいたのだろう。

翔一は独占欲が強い。
流石の衣も二ヶ月もするとそれに気づく。
衣が男子を殴ること意外に話しかけたり親しくしたりしていると、彼は乱入するのだ。必ずといっていい程。
嫉妬してくれるのは嬉しいことだ。それは勘違いしないでほしい。
しかし、やりすぎにも程がある。

好意をもって衣に近づいてくるやつらは、衣もわかる。
他の男子と明らかに接し方が違うし、何よりも自分に対してとても優しいのだ。
しかし、そういう男子とは衣はあまり接しないようにしている。
理由は言うまでもない。
しかし、自分に好意を持っていない男子も衣はすぐ分かる。なによ

り衣がその男子の好きな人を知っているというパターンが多い。そのため絶対にあり得ないとわかりきっている。
しかし、それでも翔一は乱入する。

最初のうちは可愛い嫉妬心だから誰もが放っておいたのだが、おとといの出来事ですっかり騒ぎになってしまった。
衣と翔一が恋人なのは誰もが知っていた。
しかし、翔一は抱きついたりはするが、キスは公衆の面前ではしない人なのである。衣を気遣ってというのもあるし、自分自身もそこまではしたくない。

それなのに、桐本のこととなると彼は一変するのだ。

「それってさぁ。神城君と智哉が昔ライバルだった、とかじゃないの？」
「もしそうだとしたら沙月だって知ってるでしょ？」
「うぅん・・・・」

このことを相談すると、沙月はすぐに食いついてきた。
いつもながら、沙月は衣と翔一の関係に興味津々なのだ。

村咲沙月と桐本智哉は小学二年からの幼馴染みである。
二人とも親が仲がいいということもあり、お互いと接していた時間が長く、お互いを名前で呼んでいるという程親しい。
もしも翔一が昔の智哉の友人、あるいは知り合いだったとすると沙月が知らないわけがないのだ。

沙月は首を傾げると、何かを思いついたようにバッと衣を見た。ビクっ、とちょっと驚いて沙月を見ると、彼女は悪戯を企んでいるみたいな微笑を浮かべている。

「な、何よ」

「今思いだしたんだけど。智哉、中学の時一時期寮生学校に通ってたのよ。寮生だからもちろん男子オンリー。つまり、もしかしたら神城君がそこに通っていたのかもしれないわ！！」

「っていうかさ、智哉君にきくのが一番手っ取り早くない？」

「最初からいえよ！！！」

ごもっとも。

二人はいつもながら遅刻気味の桐本の机まで行く。沙月が微笑みながら彼の前に座ると、彼は気づき顔を上げる。微笑んでいる沙月を見て、彼は少し顔をひきつらせ、椅子を少し引く。

「なんだよ。何逃げてんだよ。なにもしてねぇよ。そこに座ってろよ」

「・・・・・はい・・・・・・」

これだけで二人の関係は読み取れるて、思わず微笑を零してから衣が桐本に質問する。

「ねぇ智哉君。智哉君ってさ、もしかして翔一と知り合いだった？」

「えっ？」

疑問形で返していたが、明らかに彼は少し動揺した。それを見逃さずに沙月と衣が桐本に食いつく。

「知り合いだったの！？」
「なんでよ！そんなに私聞いてないわよ！？隠してたわね！！」
沙月が彼の胸ぐらを掴み勢いで彼に食って掛かる。予想以上の二人の勢いに、桐本は大きく目を見開く。
「ちょ、待て！沙月も知花もちょっと待て！！」
「どういうことよ智哉！！私が知らないってどういうこと！？」
「翔一と知り合いだったの！？もしかしてお互い嫌ってた！？」
「待てって！！俺は確かに神城とは中学が一緒だったけど、そこまで親しくなかったんだって！！」
その桐本の声に、二人の少女はピタっと動くを止める。自分に問いつめていた二人が落ち着くのを見て、桐本はふぅ、と襟元をただした。そして立ち、二人の肩にポンと手のせた。
「まず二人とも。もう朝のホームルームが始まってるから」
え？と二人が振り向くと確かに三人は全員の注目の的になっていた。二人は顔を赤くしながら、席に座った。

「やっぱりあの寮生学校にいた時に知り合ったの？」
「ああ。まあな」
「へぇ。翔一が寮生学校行ってたなんて初めて聞いたよ」
両手に花、とか思いながら桐本は沙月と衣に説明していた。

彼の話によると、二人は中学の頃に同じ寮生学校に通っていた。桐本は一年間しかいなかったが、翔一は二年そこに通っていたらしい。そして二人とも同じクラスで何回か話すことがあったのだ。

「へぇ。そんな偶然なんてあるのね。じゃあ友達じゃなかったけどだからと言って敵視していたわけでもないのね？」

「うぅん・・・・まあ、俺が知ってる限りではな。俺が知らないで敵視されてるっていう可能性もあるかもだけど」

「でも智哉君は別に翔一に何かした記憶はないの？」

「いやぁ。俺の記憶では・・・・」

「そっか」

何かと視線が痛いが、桐本と仲がいい沙月がいて、沙月と仲がいい衣がいる、ということで周りの者は自然に納得していた。

桐本も顔つきはどちらかと言えば整っている方で、『美』をつけてもいい少年だったというのも理由かも知れない。

「っていうか、なんでいきなりそんなこときくの？」

「え？」

桐本の質問に二人が首を傾げる。

そういえば、自分達は問いつめただけで、桐本には説明していなかった。

「いやぁ、そのねぇ。ほら、あたしと智哉君が話してる時にさ、いつも翔一が乱入してくるでしょ？いつもの翔一はあたしが男子とちょっと話したぐらいじゃあんなに嫉妬なんてしないのに、変だなぁ、と思って」

「あ、嫉妬っていうのはわかってるんだ」

「そりゃあね。いくらあたしでもあそこまでされたら嫉妬以外考え

られないでしょ？」
「そっかぁ。まあ神城君ってすごく独占欲が強そうだもんねぇ・・・」
「うん。って自分でいうのもちょっと微妙なんだけど」
少しだけ会話から取り残されたような気がしたが、沙月に付き合ってきたお陰で、女の会話に男は首をつっこまないほうがいいと勉強していた。
女と女の会話は男が首をつっこむことができるような会話ではないのだ、と死ぬ程沙月に言われてきたのである。

「おい知花。知花！ちーばーな！」
「へっ？あっえ？何？ごめん！」
衣に呼びかけた男子生徒は舌打ちをして、ん、と自分を呼んでいるクラスメートを指した。確かに少し悩んでいるような顔で立っている男子生徒が三人いる。
「お前大丈夫かよ？集中してろよ」
「うん。ごめん、ありがとう」
衣は男子生徒にそれだけ言うと、三人の男子生徒に向かった。三人は暗幕を見つめながら、うぅん、と悩んでいる。
「どうしたの？」
「あ、知花。それがさ、暗幕が足りねぇんだよ」
「暗幕？暗幕ってそんなにいるの？ここ喫茶店だよ？」
「いや、クッキングエリアにいるじゃん。店から飲み物とか食べ物

とか乗せてる所を見せるわけにはいかないだろ？」
「ああ、そういうことね。わかったわ。そこらへん探してみる」
「サンキュ。悪いな」
「大丈夫よ」

それだけ言って微笑むと、衣は教室から出て行き、他のクラスへ向かった。
まず一番ありそうな所はC組。お化け屋敷をやる、翔一のクラスだ。
正直、今はあまり翔一とは顔は合わせたくなかったのだが、自分の出し物のために、仕方がないことだった。

C組のドアの前に立つと、ドアや窓はしまり切っていて、外から見ると真っ暗である。文化祭まではまだまだなのにずいぶんと雰囲気がでている。
衣は入るのに少し躊躇ってから、勢い良くドアを開いた。

「あれ？」

予想外な事に、中はとても明るかった。というか作業が進んでいないと言ったほうがいいかもしれない。
全員がドアや窓に暗幕をはっているだけで、中は殆どの人がだらけている。

「なんじゃこりゃ」

独り言を呟いてから、近くにC組の実行委員がいるのを見て、すぐさま彼の元へ歩いた。
普段は他のクラスへの勝手な出入りは禁止されているが、文化祭の時だけは特別で、道具が足りなかったりするために出入りが自由になっているのだ。

「杉谷（すぎや）」

衣の呼びかけに他の生徒へ指導をしていた一人の黒髪の男子生徒が振り向いた。彼は衣を見ると少し目を見開き、立ち上がった。

「知花。どうしたの？」
「あのさ、暗幕ってある？」
「暗幕？ああ、あるけど」
「借りてもいいかな？うちのクラスが暗幕が足りなくてさ。ここってお化け屋敷でしょ？なんか余ってる暗幕とかないかな？」

衣の質問に、杉谷はさぁ、と首を傾げると、ちょっと待っててと言ってクラスメートに聞いていく。
衣はその様子を見ながら、密かに翔一の姿を探していた。幸いなことに今はこの教室にはいないらしく、今杉谷と話していた所は見られてはいないようだ。
翔一は最近は桐本だけではなく、衣と親しくする男子がいたら容赦がないのである。

「知花」

呼ばれて振り向くと、杉谷がたくさんの暗幕を持って立っていた。

「わぁごめん！こんなに！？いいの！？」
「ああ。俺達は確かに暗幕は結構いるけど、これは使わないみたいだから、持ってっていいよ」
「マジで！？ありがとう！助かる！」
「いえいえ」

衣は微笑み、大量の暗幕を杉谷から受け取ると、嬉しそうにC組から出て行く。杉谷はそれを少し嬉しそうに眺めてから、自分の仕事に取りかかった。

文化祭まで、あと一週間である。

第8話　翔一の嫉妬（後書き）

投稿が遅れてごめんなさいｏｒｚ
最近あまり投稿していませんよね。本当にすみません。
楽しみにしていた方々申し訳ないです・・・

あ、遅れたくせに偉そうなんですけど、感想・評価、よろしくお願いします＾＾

ここまで読んでくれてありがとうございます

第9話　気まずさ

「ねぇ」

彼女は足早に歩きながら、後ろから聞こえる声を無視した。聞こえているのはわかっているため、声の持主は少し目を細める。それをわかっていながらも、彼女は歩を進めた。

「ねぇ」

もう一度呼びかける。
今度は数段トーンが下がった声で、いかにもいらだってきた様子だ。
それでも彼女はもっと足早に校舎を歩いていく。声の持主はどんどん目を細くすると、自身も歩を進めて彼女へ追いつこうとする。

なぜ彼女が逃げているのかはお互いわかっている。いや、逃げているというか避けているというか。
原因はまぎれもなく、声の持主、翔一にある。

「ねぇ！」

翔一は声を荒げると、一気に彼女、衣に近づき、腕を掴む。彼女はそれ以上進めなくなっても振り返らず、ただただ掴まれた腕を引っ張るだけだった。

「ねぇ、衣。こっち向いてよ」

彼の声を聞いても衣は振り向かなかった。
正直、今の彼とは顔が合わせづらい。

大きなことが起こったわけではないのだが。

「こっち向けよ」

口調が変わり、より強く言い放つと、衣は苦しそうに顔を歪めてから、ゆっくりと振り向く。
そこには、自分と同じぐらい苦しそうな顔をして翔一が立っている。翔一を傷つけているのはわかっている。でも、原因はあくまで翔一にある。

文化祭の準備中だと男子生徒と接する機会はとても多くなる。そのせいで翔一が嫉妬し、また自分と男子の会話に乱入してきたら、仕事は進まない。それを恐れて、衣はできるだけ翔一を避けてきたのである。

翔一も自分が衣とのこんな関係を作った原因だと分かっている。しかし、衣が楽しそうに他の男子と話すと、醜い嫉妬心がわき上がってしまう。
自分は衣を誰よりも愛している。しかし、衣も自分のことをそう思っているのか、不安になってしまうのだ。

「・・・・手。離して」
「やだ。離したら衣、逃げるだろ」
「手。離してよ！今は翔一と話がしたくないの！」

それを言われて、翔一は目を丸めた。
衣が強く、強く、自分を睨みつけている。こんなにも衣に拒まれたのは初めてだ。

自業自得。

そう心の中で呟いていながらも、翔一は衣の腕を掴む力を強めた。
衣はその強さに少し顔を歪める。

二人は廊下の真ん中でこんなやり取りを広げている。
周りの者が注目しないわけがなく、いつの間にか二人のことを全員が見つめている。なんと言っても二年の中での公認のカップルがこんな廊下の真ん中で喧嘩をしている。
注目しないわけがないのだ。

「手を。離して」
「断る」
「――・・・・・・っ」

即答されて、衣は言葉が詰まる。
もう片方の手で彼の手を掴むと、それを無理矢理引き離す。以外と容易に手を離すことができたのは、恐らく、翔一が本気で自分を離さない気はなかったからだろう。

衣は手を離すと、自分の腕を少しさすり、翔一から視線をずらす。
翔一は真っ直ぐと衣を見つめるが、彼女は微動もしない。

「・・・・翔一、原因はわかってるでしょ」
「・・・・・・・ああ」
「だったら改善してよ。もう少し自分を抑えて。今の翔一とは、正直、話がしたくない」

翔一の目が細くなる。
自分のせいだと分かっている。はぁ、と溜息が口から溢れる。

「溜息をつきたいのはこっちよ」
「・・・ああ、そうだな」
「わかったのなら、それ、直して。それをしてからあたしと話してよ。あたしだって男子と話す度に邪魔されちゃ仕事にならないもの」
「ああ。わかった」
衣は頷くと、翔一は反対方向に歩を進め、衣もその後ろ姿を少しだけ眺めてから、自分の教室へ向かおうとする。
しかしそこで初めて自分達は注目の的になっていたと気づき、ちょっと下を向きながら急いで教室へ向かった。

「神城君と大喧嘩したんだって？」
「大喧嘩じゃないし。どこからそんな噂を聞いたんだよ」
「どこって、二年の中では持ち切りの話題よ？公認のカップル知花衣と神城翔一が喧嘩した、って」
「その普通の“喧嘩”がどうして“大喧嘩”になるのよ」
沙月は肩まで両手を仰向けに上げて、『さあね』というポーズをしてから少し笑った。それが少し癪に障り、衣が目を細めると、沙月はよりいっそう悪戯っ子のように笑った。
「噂なんてそんなもんよ。伝言ゲームみたいにどんどん内容が変わっていくの。だって衣が言うには“翔一の嫉妬のせいでちょっと言い合っただけ”って言っても、それを聞いた人は“知花衣が神城翔一と喧嘩した”って回って、最終的には“知花衣が神城翔一と大喧

嘩した”ってなるのよ。そういうもんでしょ？噂って」
「・・・・そうだけどさぁ・・・・大喧嘩なんてしてないから、そんな誤解をしないで欲しいな」
衣がそれを言うと、沙月が顔の前で手を左右に振る。
「無理無理！噂なんて誤解を解こうとすればするほど誤解が確信になっていくんだから。噂の中心人物が言ったら、尚更よ」
「沙月さぁ、なんでそんなにそういうのに詳しいわけ？」
「あら、私は情報屋と呼ばれる女よ？噂がどういうふうに流れるかぐらいはすぐにわかるわ」
「はいはい。そんなに自慢げに言わなくていいから」
衣は席から立つと、暗幕を一生懸命形に切っている男子生徒達に近づいた。彼らは衣がもってきた暗幕を見て本当に喜び、今それを一生懸命に切ってクッキングエリアの大きさに合わせている。
喫茶店のレイアウトは至ってシンプルで、教室の四分の一のスペースをクッキングエリアとして、そこに食材や飲み物を置く。その隣の四分の一のスペースは、入り口の所を少しだけ開けて、メイドや執事（流れで男子は執事になった）がお盆に食材や飲み物を置くスペースになっている。
残ったスペースは客用で、机を合わせてテーブルが8台から9台は並べる予定である。
「どう？進んでる」
衣が男子に問いかけると、彼らは親指を一つだけ上げて、『ばっちりだ』というサインを作る。それを見て衣が微笑み、他の人の作業を見つめる。

衣装作りを担当しているのは、舞と涼夏(りょうか)。
家庭科が得意中の得意で、二人とも裁縫の腕は抜群だ。しかし衣装自体を考えるのではなく、あくまで作るだけのため、その衣装を考えるのは沙月と衣の仕事である。
が、二人はまだ衣装を考えていないのだ。

「んで？衣装。どうする？」

戻ってきた衣にすかさず沙月が聞く。
彼女はシャーペンを指で回しながら、真っ白な紙を詰まらなさそうに見つめている。

「そうねぇ・・・・露出はまず控えてね」
「それはそうよ。あたしだって嫌よ」
「うん。メイドだから・・・・色はピンクとか、白とか・・・・そんな感じよね・・・・まぁ、基本の服でいいんじゃない？」
「今それを言うか。さんざん悩んだのに」
「ごめんごめん。んで、男子は・・・・・そうねぇ・・・ジャケットやズボンの色は黒でいいわよね。シャツは白だけど、ジャケットは脱いではいけないことにしようか」
「うわっ。厳し！」
「だって、私達があんな服着て恥ずかしい思いをするのに、どうして男子は楽なのよ。って感じしない？」
「まぁねぇ・・・」
「でも、問題は襟元と靴よね」
「靴は普通の学校の靴みたいな感じでいいんじゃない？襟元は、まあ、あたしがなんとかしてみるよ」
「マジで？ありがとう」
「いえいえ」

二人はそんなやり取りを交わすと、早速絵に取りかかる。
衣と沙月は絵が非常に上手で、遊びで四コマ漫画などを書いていたり、美術で賞をとったこともある。そのため絵の担当は文句なく衣と沙月に決まったのだ。

さあ。文化祭まで、あと六日である。

第9話　気まずさ（後書き）

こんばんは。あれ？こんにちは？
どっちでもいいや。

アクセス数が１００００人を超えて本当に本当に嬉しいです！！！
みなさん、本当にありがとうございます！！＞＜

さて、今回は短めです。
そして、自分でいうのもなんですが、最近つまんないですか？
文化祭当日になったら急展開ですので、そこまで辛抱をお願いします＞＜

感想・評価、よろしくお願いします＞＜

ここまで読んでくれてありがとうございます

第１０話　仲直り

衣は仰向けに床に倒されていた。
その倒された衣の両手を翔一が彼女の上をまたいで掴んでいた。
彼は衣を精一杯睨みながら彼女の両手を掴んでいる手に力を混める。
その痛さに少し衣が顔を歪めるが、それでも離してくれない。

衣は文化祭まであと三日と迫ってきたため、いつもよりも遅く学校に残っていた。
桐本や他のクラスの実行委員も残っており、生徒会議室で会議をしていたのだが、思ったよりもそれが長引き、翔一が帰ってきた五時半になっても、まだ会議が続いていた。
やっと会議が終わったのが七時十分前。ずいぶんと遅くなってしまい、急いで家に帰ったのだが、ドアを開けた瞬間に引っ張り込まれ、現在に至る。

このことは半分想定内で、半分予想外だった。
何よりも、今の翔一はとても不安になっていて、衣が遅く帰ってきたら尚更だろう。

衣は彼を見上げると、彼はとても苦しそうな顔をしている。それを見て、衣は自分の今までの気持ちがばからしくなってしまったのだ。
そう、彼のその表情を見ただけで。
三日前にも見たはずだった。彼のこの苦しそうな顔を、衣は見ている。

だが、あの時は本当に怒っていて、彼のそんな表情はあまり気に留めていなかった。しかし、今見ると、彼は耐えられないというような表情を浮かべている。

その表情を見ると、彼を、許してしまいたくなる。

「衣は」

唐突に翔一が口を開き、衣が驚いて反らしていた目を彼に戻した。
変わらず苦しそうな表情をしているが、衣を掴む力は少し弱まっている。

「・・・・・・俺のことが嫌い？」

家での翔一ではあまり考えられない質問が降り掛かってきて、衣は開いていた目をよりいっそう開いた。
しかし、目の前の彼の顔は真剣で、かつ苦しそうだった。
衣は激しく首を横に振る。

「ちがっ、違うの！翔一のことが嫌いとかじゃなくて、本当に！」

必死になって否定する衣が愛おしくて、思わず唇を重ねる。
衣は一瞬驚いて目を見開いたが、彼がこんなにも不安だったのを思い返すと、これぐらい許してもいいと思う。

「んっ・・・・・はっ・・・・・しょ、しょう―んっ！」

口が一瞬離れて、彼の名前を呼ぼうとするが、また唇が塞がれる。
衣は彼のシャツを両手で力なく掴むと、キスが激しくなる。

そこで。

不意に、自分の身体に違和感を感じる。
そういえば、自分の両手が離されて、彼のシャツを掴んでいるが・・

・・

まさか、と思い自分の身体に目をやると、自分の胸に彼の手が添えられている。

・・・・・・・・・・・・・・

一瞬の沈黙。

「調子に乗るんじゃねぇ！！！！！！！」

大声で叫び、彼の腹に両膝を食い込ませると急いで起き上がり、できるだけ翔一から距離を取る。翔一は腹を抱えながらも、少しニヤリと笑い、逃げた衣を見つめた。

「このっ・・・・・！変態下衆野郎！！」

「なんとでもいえよ。俺は衣と仲直りしたから、もう、かん・ぜん復活だぜ」

「仲直りした瞬間に開き直ってんじゃないわよ！！」

衣は自分の胸元を両腕で抱え込みながら翔一を睨みつける。

さっきとは全くもって立場が逆である。

しかし、二人の間の空気は、とても幸せな感じになっていた。

「喧嘩はすぐするし、仲直りもすぐするし。つまんないの」
「あんたは人の恋愛に何を求めてるのよ」

翔一と仲良く話している衣を見て、戻ってきた衣にすかさず沙月が言い放つ。いつもながらも衣は溜息をつき、自分の席に腰を下ろす。衣の言葉に沙月が不服そうに頬をふくらませ、うぅん、と悩みだす。

「そうねぇ・・・・もうちょっと面白いこと？いでっ」

衣は軽く沙月の頭を叩くと、沙月は面白そうに笑う。

「とにかく、衣装は舞や涼夏が作ってくれてるからいいけど！食事とか飲み物とかは頼んであるの？」
「それならばっちり。もちろん、委員長の月夜ちゃんが頼んどいてくれましたぁ！！」

沙月は近くにいた少女の肩を抱くと、ぐいと、自分のほうへ寄せた。いきなり肩を抱かれた少女は暗幕をもったまま、え？え？と沙月と衣を交互に見つめている。

西村月夜（にしむら つきよ）はこの2年B組の委員長でしっかり者。
人の気づかない所にすぐ気づいたり、何かが足りなかったりする時でもテキパキと対応する頼もしい人間である。
なぜ実行委員にならなかったのかは謎である。

衣は戸惑っている月夜の肩から沙月の手を離すと、もう一度彼女の頭をペチッと叩く。いたっ、と沙月がわざと大袈裟に痛み、月夜があたふたする。

「あ、大丈夫よ月夜。大袈裟に痛がってるだけだから、心配しないで」
「そ、そう？」
「ええ。それより、食事とか飲み物とかありがとね。助かったわ」
衣がそういうと月夜は微笑みを浮かべて首を左右に振る。
「ううん。私ができるのなんてこのぐらいだから。力になれてよかった」
それだけ言って少し会釈をしてから、月夜は自分の仕事に取りかかった。

文化祭まであと二日。
文化祭三日前になると授業は一切なくなり、朝から放課後までずっと文化祭の準備である。そのため、生徒はよりいっそう頑張って取り組み、最優秀賞がとれるよう、頑張るのである。

衣達のクラスはまだ看板もつくっていないため、今日と明日しかない。
下書きはもう衣と沙月が書いたが、そのペンキ塗りが一回失敗し、二回目をしないといけなかったのである。そのため、看板ようのボードももう一度頼み、全員で予算を出し合い、今、衣と沙月が書いている所なのである。

「まったく。まさかあそこで色を間違えるとは思わなかったわよ」
「まあね。なんとかごまかせると思ったんだけど、意外と目立つのよね」
「本当よ」

二人はそんな会話をしながら作業を進める。

そして、文化祭当日を迎えた。

第１０話　仲直り（後書き）

毎日本当に大人数のアクセスがあって、本当に嬉しく思っております＾＾

皆さん本当にありがとうございます＞＜

感想・評価お願いします＞＜

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第１１話　再会（前書き）

今日も最後までおつきあい願います。

第１１話　再会

さて。
翔一とも無事仲直りをし、衣装も看板も無事に作り終えた２年Ｂ組は、文化祭当日を迎えていた。

「みんな！今日は待ちに待った文化祭よ！！盛り上がっていくわよ！！」
『おおおお！！！！！』

現在、朝の７時５０分。
普段は学校に来るのは８時２０分。
文化祭当日は、最後の仕上げみたいなもので、衣装に着替えたり、食事、飲み物を並べたりする時間である。
男子は女子が一旦教室から出た後、沙月と衣が考え、舞と涼夏が作った執事の服に着替える。
襟元は沙月が金の太陽みたいなブローチをネクタイに通してくれて、結局は普通のシャツみたいになってしまったが、結構かっこいい。

女子が教室からでて五分程した。
執事の服は細かい所があるから、そこを整えるのに少し時間がかかったりする。

男子が着替え終わり、桐本がひょいと顔を出す。

「終わったよ」

少し照れくさそうに言う。
沙月は目をキラキラさせ、衣の手をひっぱると一気に教室に攻めよ

る。
後ろの女子もみんな集まり、中の男子を見る。
『・・・・おおおお・・・・・』
静かな感動の声が上がる。
男子は全員同じ黒い服を着て、袖口やら襟元やらを直しているが、全員とても似合ってる。
「うわぁ、うわぁ！かっこいいよみんな！」
「思ったより似合うね！」
「これなら行けるかもよ？」
「いけるいける！」
「いいねぇ、みんな！ばっちりだよ！」
次々に女子の評価の声が上がり、照れ臭そうに男子がお互いを見る。
それを見て、衣と沙月も微笑み、今度は女子が着替える番だ。
しかし、女子は男子とは違ってそんな堂々と教室の中で着替えなどできない。
女子は教室に入ると、余った暗幕をドアと窓の所につけ、そこから着替えを始める。
「あんた達、いくら私達の可愛い姿を見たいからってのぞかないでよね」
「のぞかねぇよ！のぞくわけねぇだろ！」
沙月が一つ忠告して、女子は衣と沙月が考え、舞と涼夏が作ったメイド服に着替えた。
着替え始めて十分弱、やっと終わったのか窓の暗幕がとれる音がす

る。
次にドアの暗幕がとれて、青いメイド服とお揃いのヘッドドレスをしている沙月がピョコっと顔を出した。

「終わったよ～」

男子はお互いを見ると、変態にならないようにゆっくりと集団で教室に向かう。
沙月がにっこり微笑み、もう一度顔をひっこめると、男子が教室を覗き込んだ。

『・・・・おおおおおお・・・・・』

女子と同じように静かに感動の声が上がる。
メイド服は全部同じ色ではなく、ピンク、青、黄色、薄緑、白に分けられる。
衣はピンクで沙月は青。
フリルは色に合わせて、着ている服の色の薄い色になっていて、ヘッドドレスも同じ色である。
正直に言って、全員とても可愛らしくとても似合っている。

「へぇ、なかなかいいじゃん」
「うん。可愛いんじゃね？」
「これなら本当にいけるな」
「おうよ」

男子がお互いに言うと、女子もお互いを見て微笑み。

「よっしゃあみんなぁ！！！盛り上がっていくぞ！！！！今日の文化祭！！さいっこうのものにしようぜ！！！！」

『おおおお！！！！！！！！』

桐本の声に、２年Ｂ組は最高の盛り上がりで文化祭を始めた。

午前九時。

愁桜学園の門が開き、待っていた人々が入ってくる。

宣伝係は宣伝ような看板を持ちながら校舎内を歩き、校舎の外に出し物がある者は校舎の中を叫びながら回る。

まあ、全員最優秀賞を狙っているため、当然な行動ではあるが。

さて、女子に反感を買ったメイド喫茶はというと．．．．

「すみません、アイスココアください」

「かしこまりました、少々お待ちください。クッキングエリア！！アイスココア一つ、三番テーブル！」

『オーケー！』

「あ、チーズケーキ二つとコーヒー二つください」

「わかりました。コーヒーはブラックでよろしいですか？」

「はい」

「クッキングエリア！！チーズケーキ二個、コーヒーブラック二個！！五番テーブル！！」

『了解！！』

「あ、すいません」

「はい！」

大繁盛である。
少し予定より多いテーブルを１０台用意し、その上外にもテーブルを設置し、そこにもクッキングエリアを作ったのだが、それでは足りない程客が多い。
今だって満席で、外の席にもまだ十人程待っている。
まさかここまで繁盛するとは誰も思っていなく、休憩している人は一人もいない。
朝の時点では客は少なかったが、お昼に近づくにつれて客がどんどん増えてくるのである。
しかも、メイドだけではなく執事に引かれてくるものもいるため、男性客も女性客も同じぐらいいるのである。

衣はオーダーを取る係で、月夜と舞と一緒にオーダーを取りまくっている。
三人では足りないぐらいで、男子も三人オーダーを取っている。
クッキングエリアには女子が六人と男子が六人で飲み物と食べ物の管理をしている。

外でも同じで、そこには涼夏と他の女子が三人、男子が四人。
クッキングエリアは教室よりも多いため、残りの十一人の男子は外のクッキングエリアにいる。
外も満席で、思ったよりも大繁盛な結果に全員が満足していた。

隣のＣ組もなかなかの繁盛らしく、結構怖いらしい。
一人では入れないぐらいだという噂も広がっていた。
どうやら、普通のお化け屋敷みたいにあからさまにいそうな所にお化けがいるわけではないのである。
予想外の所から飛び出したり、照明をいきなり消したりなどの工夫をしているらしい。
それが余計恐怖心をあおぎ、もう一度入っても仕掛けは同じではな

いので、何回も挑戦できるらしいのだ。
どうやら、最大の敵はC組のようだ。

「衣ちゃん！九番テーブルお願い！」
「わかった！お待たせしました！ご注文は？」
「えっと、ストロベリーケーキとチーズケーキを一個ずつ。あと、アイスココアとコーヒーをお願いします」
「コーヒーはブラックでよろしいですか？」
「あ、いえ、できればミルクを．．．．」
「かしこまりました、ミルクをお付けいたします。クッキングエリア！！！ストロベリーケーキとチーズケーキを一個ずつ！！あと、ココアとコーヒーを一個ずつミルクつけて！！九番テーブル！！」
『了解！！』
「あの、すみません」
「はい！少々お待ちください！舞！七番テーブルお願い！」
「了解！」
「お待たせしました。ご注文は？」
「ショートケーキを三つと、オレンジジュースを一つ。あと、ホットココアを二つください」
「かしこまりました。少々お待ちください。クッキングエリア！！ショートケーキ三つ、オレンジジュース一つとホットココア二つ！！六番テーブル！！」
『オッケー！！』

二年B組は二時間程ずっとこの調子で、お昼が終わり、やっと客が減ってきた所でやっと全員が休憩を取ることができた。
ドアと外には
『ただいま品切れです。非常に申し訳ありませんが、少々お待ちください』
という看板を付けている。

嘘ではないが、大半はみんながただ休んでいるだけである。

「つ、疲れたぁぁ・・・・・・・」

「本当・・・・明日もこの調子でいけんのかな・・・・？」

「マジで、俺腕がヤバい」

「あたしなんてもう声がガラガラよ。そんぐらいで文句言わないでよね」

全員椅子や壁にもたれかかり、天井を見ながら話している。

体力を朝の時点で消耗してしまったらしく、もう誰も動いていない。

衣はそれを見回しながら微笑んだ。

最初はどうなるかと思ったが、なんだかんだ言いながら全員ちゃんと協力していて、ほっとしたのだ。

「あたしなんて客に変態がいてさ、写真とってくれってめっちゃうざいの」

「マジで！？どうしたの！？」

「もちろん断ったわよ」

「そっかぁ、涼夏は可愛いもんねぇ」

「ま、写真なんて取る前に、多分っていうか、絶対に一瀬君が邪魔するだろうけどね」

「うるさいよ」

涼夏が少し顔を赤くして怒る。

一瀬は涼夏の彼氏で、フルネームは一瀬陽介。

高一のときに付き合いだし、それからずっと続いている、実に仲のいいカップルである。

「じゃあ、知花と村咲は休憩とっていいよ。あと、陽介と城内も」

「ほんと？午後大丈夫なの？」

「大丈夫。どうせ客はお昼が終わっちまったからそんなに来ないだろ」
「本当？じゃあ、任せるわね」
「おう。任せとけ」

桐本はガッツポーズをすると二人を追い出し、さっさと回ってこいと促す。
衣と沙月は制服に着替えてから、C組に向かおうと教室から出ようとすると、衣がドン、と誰かにぶつかる。

「「うわっ」」

お互い少しよろける。

「わっ、ごめんなさい！大丈夫ですか！？」
「ああ、大丈夫ですよ．．．．」

衣が急いで声をかける。
ぶつかったのは恐らく自分達と同じぐらいの男子生徒。
制服を着ているが、その制服は名門校の男子校の制服である。

すると、

「え。衣？」

え？と全員の注目がドアに向く。
男子生徒は少し混乱したような表情を浮かべて、衣を見ている。
衣はしばらく首をひねっていたが、何かを思い出したように目を丸める。

「うそ・・・・」

沈黙が流れる。

「響（ひびき）・・・・・？」

第１１話　再会（後書き）

やっと文化祭が始まりました。
ひっぱってすみません・・・・

さて、衣と謎の男子生徒の出会いというか再会ですが、彼は一体何者なんでしょう？
そして、なぜあんなにも驚いているのでしょうか？
それは、また後日。

感想・評価お願いします。本当にお願いします＞＜

ここまで読んでくれてありがとうございます。

そういえば、人物紹介してなかったな。読みたい人だけどうぞ。

皆様こんにちは。
作者の夢花でございます。
この度は『旦那様はドＳ』を読んでくださって、誠にありがとうございます。
おかげさまでアクセス数が、１１話目で、１７０００人を超えています＞＜
そして、ユニークアクセスが５０００人を超えております。
本当にありがとうございます＞＜

あと、お手数ですが、感想・評価、どうぞよろしくお願いしますｏｒｚ

さてさて。
急展開の『旦那様はドＳ』ですが、この先どうなるのか、作者の私もわかりません。
はい。頼りなくてごめんなさい。

あ、ちょっと話がそれましたが、実は・・・・・
私は人物紹介をしていなかったのです！！
がーん。
いや、たいしたことねぇじゃん、とツッコミを入れた方もいると思います。
いやあ、
おととい、話を更新した後に、すぐその後の展開を書くのもなぁ・・・と思いまして・・・・
まっ、ちょうどいいし、人物紹介でもやるか！
みたいなノリで。

あとがきに人物紹介するっていうのもありなんですが・・・・
なんとなく、急展開の次をすぐ書いちゃうとインパクトが！みたいな感じで。

ぶっちゃけ本音はただたんに私が人物紹介をしたいだけなんですけどね。

それでは、本題へ、どーぞ！！

ええとですね。
まずは本作の主人公。
一人。あれ？二人？

まあ、いいや。

知花（ちばな）　衣（ころも）♀

愁桜学園高等部二年。
２年Ｂ組所属。
運動神経が非常に良く、女子の中で一番の記録を持っている。
５０メートル走は６秒台。
１００メートル走は１３秒台という驚異的な能力を発揮しています。
しかし、部活は入っていません。
頭はとても悪いというわけではないが、とてもいいというわけでもない。人並み。

顔は非常に可愛い顔立ちだけど、性格が乱暴で恋愛目当ての男には興味がないから、ファンクラブ的なものはない。
１７歳だが既に結婚していて、夫と二人で生活をしている。
親友は沙月で、二人は高一からの知り合い。
文化祭の実行委員を任されるなど、責任感が強い。
言いたいことは躊躇わずにズバズバ言う人で、それが目上の人でも容赦ない。
学校ではＳだが、家に変えるとＭになってしまう。

次は本作の主人公。
二人目。っていうか、主人公って二人いていいわけ？
それ、主人公じゃないよね。

神城（かみしろ）　翔一（しょういち）♂

同じく愁桜学園高等部二年。
２年Ｃ組所属。
運動神経抜群、頭脳明晰でおまけに顔もいい超恵まれた少年。
５０メートル走は５秒台。
１００メートル走は１１秒台という、衣よりも驚異的な能力をもっている。
部活はもちろん陸上部。
入ってすぐに三年を抜かして、エースになる。
成績は常に学年首位を保っている。
一年間ヨーロッパに留学していて、英語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語など、計７ヶ国語が話せる。
一年間あっちにいたため、日本では高二だが、年齢的には高三。
結婚していて、妻、衣とは二人暮らし。

『衣命』がモットーの衣ラブな人。
非常に嫉妬深く、衣が少しでも他の男子と親しげに話していると乱入するなど、衣のことになると大人げない。
学校ではいつも衣に殴られているMキャラだが、家に帰ると、もちろん、ドSになる。

そして、脇役。
脇役といっても結構重大な役割をしてくれてるけどね。
意外と脇役が好きな作者です。

村咲（むらさき）　沙月（さつき）♀

同じく愁桜学園高等部二年。
2年B組所属。
衣の一番の親友で理解者。
衣と翔一の間柄を何かといつも疑っている。
運動神経は人並みだが、頭は非常に良い。
学年三位という成績を保っているが、本人はせめて二位には行きたいと思っている。
部活は衣同様、帰宅部。
ものすごい美少女で、その美貌に惚れる人が多く、およそ三十人のファンクラブがある程。
学年の中では情報屋と呼ばれ、人が知らないようなプライベートな情報まで知り尽くしているため、敵に回すと怖い。
智哉の幼馴染みで、彼をいじめるのが趣味の完璧なドS。

桐本（きりもと）　智哉（ともや）♂

同じく愁桜学園高等部二年。
２年Ｂ組所属。
沙月の幼馴染みで、いつも彼女にいじめられている。
文化祭の男子実行委員を任されているが、そういう行事が好きなだけである。
運動神経も頭脳も人並み。
部活は男子バスケ部で、一応レギュラー。
沙月にいつも情報を教えているのは彼のため、情報屋と呼ばれるのは彼のほうが相応しいのかもしれない・・・・

妃（きさき）　舞（まい）♀

同じく愁桜学園高等部二年。
２年Ｂ組所属。
衣と沙月の友人。
上記の通り、名前が二文字なのを好んでいなく、自分の名前に少しコンプレックスを抱いているが、実際は可愛いとみんなに評判。
髪は軽いパーマがかかっていて、顔は少し丸め。
はやっているものが大好きで、すぐに影響される。
部活は女子バスケ部だが、補欠。
手先が器用で、非常に裁縫がうまい。
そのため、文化祭の衣装作りも涼夏と共に全部作っている。

工藤（くどう）　涼夏（りょうか）♀

同じく愁桜学園高等部二年。
２年Ｂ組所属。
衣と沙月の友人。
推理小説やミステリーものを読むのが大好き。
漫画では、名探偵コ〇ンが大好きで、それにでてくる工藤〇一と名

字が同じのため、自分の名前がすごく好き。
髪は真っ黒で白いカチューシャをいつもしている。
舞と同じでバスケ部だが、レギュラー入りしている。
手先が器用で、舞と共に文化祭の衣装を全部作っている。

一瀬（いちせ）　陽介（ようすけ）♂

同じく愁桜学園高等部二年。
２年Ｂ組所属。
涼夏の高一からの彼氏で、非常に仲がいい。

城内（しろうち）　健助（けんすけ）♂

今の所名前しかでてないけど、この後も登場させる予定。
陽介の親友という設定です。

杉谷（すぎや）　冬樹（ふゆき）♂

下の名前初登場。
愁桜学園高等部二年。
２年Ｃ組所属。
Ｃ組の文化祭実行委員。

倉野（くらの）　美佐枝（みさえ）

下の名前初登場。
愁桜学園高等部三年。
クラスは不明。
翔一に好意を抱いていたが、衣がいるのを知って、衣を問いだす。
衣を殴ったことがある。

保健室によく通っているらしく、保健の先生とか結構な顔見知り。

浅海（あさみ）　順子（じゅんこ）

愁桜学園高等部の保健室の先生。
非常に親しみやすい、ほんわかした女性でニックネームは『アサちゃん』
生徒と話し込んで、逆に手当をするのを忘れることがあることから、『天然アサちゃん』と呼ばれることがある。
順平の双子の妹。

浅海（あさみ）　順平（じゅんぺい）

愁桜学園高等部二年の物理教師。
2年B組の担任。
生徒みたいに接することができる教師で、生徒からの人気が非常に高い。
順子の双子の兄。

幹原（みきはら）　和花子（わかこ）

愁桜学園高等部二年の英語教師。
2年D組の担任。
ニックネームは『みっきー』や『みきちゃん』
美人だが、言葉が乱暴というのがちょっと傷。
順平と同じく生徒みたいに接することのできる教師だが、携帯などの不要物を見つけると即没収。
その上、トイレ掃除二週間という罰を受ける。

ふぅ。
一通り学校関係者の紹介はこれで終わりです。
名字が初登場や、下の名前が初登場という人がいましたねぇ。
それでは、次でーす。

知花（ちばな）　菊子（きくこ）♀

衣の母親で、翔一の義母。
現在、夫と翔一の親と海外出張中。

知花（ちばな）　幸治（ゆきじ）♂

衣の父親で、翔一の義父。
現在、妻と翔一の親と海外出張中。

神城（かみしろ）　怜子（れいこ）♀

翔一の母親で、衣の義母。
現在、夫と衣の親と海外出張中。

神城（かみしろ）　淳之介（じゅんのすけ）♂

翔一の父親で、衣の義父。
現在、妻と衣の親と海外出張中。

この話の最後のほうにちょっとネタバレするから。
読みたい人だけ読んでね。

これで終わり。
見直してみると結構ありますね。
名前初登場という人が結構いますね。

さてさて。
次回はいよいよ本編再会です。

最後まで読んでくださってありがとうございます。
そして、本当に感想・評価お願いします。
図々しいですが・・・・・

響が誰なのか。
以下、ネタバレ注意。
いや、そこまでネタバレじゃないかもしれないけど、ネタバレが嫌いな人は読まなくてもいいですよ。

←

光夜（こうや）　響（ひびき）♂

文化祭の時に衣にぶつかった少年。
実は衣の幼馴染みで、衣が愁桜に通っていると聞いて、文化祭で探しにきていた。
二人が会うのは、五年ぶり。

そういえば、人物紹介してなかったな。読みたい人だけどうぞ。（後書き）

あとがきいるんですかね？
この中で既にあとがきっぽいこと書いてるし。
こういうふうにみると、キャラって結構見直せますよね。
なんか抜けてる人とかいないですかね？

ここまで読んでくれてありがとうございます

第１２話　響

「で？どういう関係よ。あの二人」
「知るかっつーの。私だって会ったことないわよ」
「沙月もないの！？親友なのに！？」
「あのねぇ、親友だからってなんでもかんでも知ってるわけじゃないのよ？実際、私と衣が会ったのって去年だし」
「そうだけどさぁ、衣ってなんでもかんでも沙月に話すじゃん」
「だーかーらー、なんでもかんでもじゃないっつの」
「俺・・・あいつをどっかでみたことがあると思うんだよね・・・」
「何？雑誌か何かにのってんじゃん？かっこいいし」
「いや、そうじゃなくてさ」

沙月と舞はこんな会話を教室の外をのぞきながら交わしている。
その後ろには桐本がいる。
いや、のぞいているのは沙月と舞だけではない。
Ｂ組、ほぼ全員が衣と“響”という男性の姿を見ている。

衣は『響・・・？』と呟いた後に、二人とも呆然とそこに立ち尽くしていたため、沙月が気をきかせて（？）二人を店から追い出したのである。
少々戸惑った二人だったが、響は教室の外の壁に寄りかかり、その前には戸惑っているのが分かる衣がいた。
二人はさっきから一言も交わしていない。

響はものすごい美少年で、翔一と並ぶ程顔が整っている。
背もスラリとのびていて、おそらく１８０ｃｍはいってるだろう。
そんな二人の美男美女が並んでいると、周りの者は自然とそこを避けるらしい。

「うーん・・・神城君を呼んだほうがいいのかな？」
「いや、やめたほうがいいと思う」
沙月の言葉に、意外と桐本が否定をした。
沙月は振り向くと、彼を少し睨みつける。
「どうして智哉がそんなこと言うのよ。呼んだほうがいいでしょ？」
「いや、だから、あんなに嫉妬深い神城が、知花とあいつが一緒にいる所をみたらどう思うよ？」
「うん、まあ、まずは乱入するでしょうね」
「普通にいってのけるなよ」
呼ばないほうがいいと思ったのは、もちろん、桐本だけではない。ここのところ、二年だけではなく、一年も三年にも翔一の嫉妬深さは知られている。
そんな嫉妬深い翔一が、衣を名前で呼んでいる、しかも親しげなイケメンが衣と話している姿を見たらどうなるかは、全員見当がついていた。
正直、沙月もそう思っていたが、衣の知り合いなのならば、もしや翔一も知っているのではないかと思ったのだ。
しかし、
「俺は神城と中学が一緒だから知ってるけど、神城と知花って別に幼馴染みとかそういうのじゃないから、知花の学校の外の友人は神城は知らないんじゃないのか？」
その思いは見事に桐本の一言でかき消された。
沙月はちょっと頭に来て、軽く桐本を叩くが、そうねぇ、と再び考

え込む。
桐本は少し顔を歪めながら腕をさする。
「確かに、神城君と衣って小さい頃からの知り合いってわけじゃないからねぇ・・・そっか・・・・でもさ、それでも一応呼んだほうがいいと思わない？」
「いや、思わない」
「即答しないでよ」
今度は沙月と桐本のしょうもない争いが起こり、周りの者は溜息をついた。
そして、視線は再び、衣と響に戻る。
一方、見られていることが分かっている衣はちらちらと響のほうを見ては、またすぐに視線を下におろす。
正直、ここで彼に会うとは夢の夢にも思っていなかったのだ。
「・・・・・・あのさ」
長い長い沈黙を破ったのは、響であった。
衣は驚いて顔を上げる。
響は翔一程の身長があるため、衣は見上げないと、彼の顔が見えなかった。
「正直に言うけど、俺、衣を探しに来たんだよね」
「え？」
素っ頓狂（すっとんきょう）な声が出る。
予想外の彼の言葉に、衣は目を丸めた。
響は視線を反らして、地面を見つめている。

衣は何回も瞬きをして、やっとの思いで口を開けた。
「あ、あのさ。どうやって、あたしが愁桜にいるって、わかったの？」
「親父に詮索させた」
クスリ、と衣が笑う。
「相変わらずおじさんをこき使ってるのね？」
「いや、親父は自分から進んで探してくれるから。衣は今頃どこにいるんだるろうって言ったら勝手に詮索されてさ。ま、俺も衣に会いたかったからよかったけどね」
響が笑い、衣の頬が少し赤くなる。
彼の微笑みは昔から自分の中をふにゃふにゃにする。
しかし、そこで翔一の顔が浮かんできて衣は首をぶんぶんと横に振った。
「いや、うん、あたしも響に会いたかったけど、だからってこんな唐突に来なくても」
「俺も連絡入れた方がいいと思ったんだけど、どうせなら驚かせようと思って。まっ、まさかこんなすぐに見つかるとは思ってなかったから俺自身が驚いちゃったけどね。メイド服着てたから最初は気づかなかったよ」
「っていうか、メイド喫茶に真っ先に入るあなたもどうなの？」
衣の指摘に響が苦笑を零す。
「いや、それは男の本能っていうことで見逃してよ」
「翔一と同じようなこと言ってるわね・・・」

「翔一？」

途端に響の顔から笑顔が消える。
しまった、と衣が口を覆う。

「衣？“翔一”って誰？」
「いや、えと、友達・・・・・？」

疑問符がついたのがよくなかった。
響の目が鋭くなる。

「なんで疑問形なの」

もう彼の言葉に疑問符がついていない。
無感情で問うてくる。
冷や汗をかいているのが分かる。
衣は目を泳がせた。

「えと・・・」
「翔一って俺のことだけど？」

腕が腰に回される。
それが翔一だと分かるのに、すこしかかった。

「翔一！？」

衣が驚いて彼を見ようとするが、かっちりと腕が回っているため身体が自由に動かない。
ましてや、ぴたりとくっついているため頭も動かない。

前を見ると、目の前には自分と同じぐらい驚いている響がいる。
しかし、彼の目が途端に先程よりも鋭くなる。

「お前。誰」

声がドスンと低くなり、衣が思わず動きを止める。

「お前こそ。誰だよ」

負けじと翔一がトーンを落として響に問いかける。
声が低くなっている時は、翔一は本気だという証拠である。
見つめ合っているだけで気迫が伝わってくる。

「はい。そこまで」

全く場に会っていない声が三人に降り掛かる。
後ろから来た声に驚いて三人が振り向く。

桐本が―驚いているクラスメートを背に―両手を上げている。

「智哉君？」
「・・・・・・ んだよ、お前」

チッ、と翔一が舌打ちする。
翔一は文化祭の件で非常に桐本を敵視している。

しかし、意外にも桐本はそんな二人の言葉をよそに驚いている響を見つめた。
いつもの桐本ならこういう状況では怯えているはずだが、なぜか顔には笑みが浮かんでいる。

「どこかで見たと思ったら。お前、光夜(こうや)だよな。光夜響。中一の頃に双聖男子学院(そうせいだんしがくいん)に通ってたよね」
「えっ。智哉君、なんで知ってるの！？」
驚愕で言葉がでない響の変わりに衣が聞く。
その問いに桐本が微笑みながら振り向く。
「いや、俺も中一の時は双聖に通ってたんだよ。俺の家族は転勤族だったからさ。そんで、同じクラスじゃないんだけど、中学の頃からかっこよかったから相当目立ってたよ。だから俺は知ってるよ。っていうか、その制服を見ると光夜はもう高等部いってんのか・・・俺のこと覚えてるかな？同じ社会科クラスだったんだけど。桐本智哉って名前覚えてない？」
「・・・・・・・・」
「ちょっと、響！聞かれてるよ！？」
さっきから一言も発していない響に対して衣が呼びかける。
名前で呼んだことに対して、翔一が少し目を細める。
響が我に帰り、慌てて答える。
「えっ、あ、いや、覚えてると思う・・・・多分。社会科クラスの桐本ってのはいた気がする」
「そ。それが俺」
桐本がにっこりと微笑み、見ていたB組を含め、周りの者は全員驚いていた。

「智哉の中一の頃の同級生で衣の幼馴染みかぁ・・・・世界は狭いわね」

忙しく仕事をしているみんなをよそに、休憩をとっていた衣は沙月と回っていた。
しかし、予定みたいにお化け屋敷にいってるのではなく、メイド喫茶の中で話している三人の男子生徒を見つめていた。

「まぁねぇ・・・・まさか智哉君が響と知り合いだったとはねぇ」
「ほんとほんと。神城君と知り合いだったっていうのも驚いたけど・・・・流石転勤族。知り合いの幅が広いわねぇ」

感心したように沙月が腕を組んで椅子に寄りかかる。
隣でさっきから話している沙月をよそに、衣は話し込んでいる三人を見つめていた。
さっきから桐本が状況を説明して、響を翔一に紹介している。
相変わらずお互い不服そうな顔を浮かべているが、さっきよりはいい空気になっている。

衣ははぁ、と溜息をつくと、この先どうなるのかを思うと、不安が押し寄せてきた。

第１２話　響（後書き）

ということで、人物紹介を挟んで、急展開の続きです。
ネタバレを読んだ人は最初から響のことを知っていましたが、智哉が知り合いだったとは予想外でしょ！？
とか言ってみるけど、最初は智哉が響と知り合いという設定はなしだったのです。

翔一と響のいがみ合い、みたいな感じがよかったんだけど。
衣は身動きとれなかったし、よし、たまには智哉をいれてみるか！
みたいな？
なんか、智哉が沙月と同じぐらい目だってきた。

感想・評価よろしくお願いします＞＜本当にお願いします＞＜

ここまで読んでくれてありがとうございます

第13話　修羅場（前書き）

ちょっと長めですが、今回も最後までよろしくお願いします

第13話　修羅場

「ええと、光夜、こいつは神城翔一。俺の隣のクラスで、中学は一緒。神城、こいつは光夜響。中一の時に同じ学校に通ってたんだ」
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

無言のにらみ合いに、さっきの勇気はどうしたのか、桐本が冷や汗をかいている。
いや、翔一と響が衣を挟んでの対面でなければ、おそらく『よろしく』『ああ、よろしく』みたいな展開になっていたことだろう。
しかし、翔一は響が親しげに衣と話す所を見ているし、響も翔一が衣の腰に腕を回した所を見ている。
正直に言うと、響は衣のことが好きなのだ。もちろん翔一はそれを察していて、自分達の関係を言うタイミングを狙っていた。

そんな様子を遠くから衣と沙月、そして働いているB組の者が全員見ていた。
いや、働いている者はちらちらと。

「んで？衣？あんた、まさか私達がなにも聞かずにあんたを取り逃がすとでも思ってるわけ？」
「いや。全くもって思ってない」
「よし。いい心得だ」

沙月がガッツポーズをし、ミリ〇ネアの音楽を口ずさむ。

「それでは、まず第一問。じゃじゃん。あの響君というのは一体あなたの何？」

「ミリ〇ネア関係ないじゃん」
「いいからいいから。答えて」
「だから幼馴染みって言ったじゃん」
「それだけ？」
「それだけ」

なぁんだつまんない、と沙月が椅子にもたれかかるが、すぐにまたピンと背筋をのばし、もう一度衣に質問をしてくる。衣は半ば呆れながらも、仕方なく彼女の質問に答えることにした。

「第二問。じゃじゃん。何歳からの？」
「ええと、確か・・・・四歳かな？」
「うっそ！マジで！？」
「マジで」
「うぉおお。結構長い付き合いなんだね」
「まあね」
「それでは第三問。じゃじゃん！！」
「ああ、もうその効果音いらない」
「いいの。盛り上がるでしょ？」
「全然」
「はい。第四問。じゃじゃん。なぜ彼は衣を見た時、あんなにも驚いたんですか？」
「あんなにも早くあたしを見つけるつもりはなかったと思うし、何よりも五年ぶりだからね」
『五年！？』

衣の答えに沙月だけではなく、周りにいた舞達の声も重なった。衣は驚いて目を見開くが、うんと素直に頷いた。

「ええ。そうよ。小六の時に響が引っ越しちゃったから、それ以来

は会ってないわね」
「五年もすれば普通は容姿とか変わるけど・・・・なんでわかったのよ」
「雰囲気かな？響っていつでも独特な雰囲気をかもしだしてたし、男子の中であたしのことを名前で呼ぶ人って限られてるもの」
「そっかぁ・・・・まあ衣のことを名前で呼んでる男子って、私も知ってる限りでは神城君だけだしねぇ・・・・」
「うん。でしょ？」
「でもさぁ、響君もよく衣のことわかったわよね」
「うーん・・・・あたしもなんか独特な雰囲気でもあるのかな？」
「ま、偉そうなのは間違いないけどね」
「うるさいわね」
「でもさぁ、正直に言ってどういう関係なの？」

沙月の質問に、一瞬衣が考え込む。
そして覚悟をしたかのように話しだした。

「私と響はね。四歳の時に初めて会ったの。今でも忘れてないわ。彼は小さい頃から可愛い奴でね、女の子とか親に大人気だったのよ。その中でも、彼の母親とあたしの母親が仲良くてね、子供も必然的に仲良くなっちゃったのよ。別にあたしも響のことは嫌いじゃなかったし、全然構わなかったの。うちの母親と響の母親は同級生で、同じ学校に通ってたからあたしと響も同じ学校にかよわせてさぁ、お陰で小学校は全部一緒で、中学まで同じ予定だったの。まあ、響が引っ越しちゃったからそんなことではなくなっちゃったんだけどね。響は優しい奴でさ、あたしと響が付き合ってる、とかっていう噂は絶えなかったんだけど、どんなときでも響は否定してくれて、強く言うと逆に定着しちゃうからって普通に言ってたの」

クスリ、と衣が笑う。

「あたしは響と一緒にいるのが当たり前だったからね。多分回りの人に取ったら付き合ってるように見えたんだと思うの。まあ、無理はないな、って今は思うわ。あたしと響は—自分でいうのもなんだけど—すっごく仲良かったから小六の時に響が転校しちゃうって聞いた時は大泣きしてたわよ。あたし」

ふふっ、と笑って会話を終わらせると二人はもう一度翔一達に視線を戻す。相変わらず無言のにらみ合いが続いている。真ん中にいる桐本が冷や汗をかいているが、今ここで抜けてしまったら明らかに二人の中の雰囲気がまた悪くなるに違いない。

三十分後。
再びB組が『品切れのため』休憩をしている時間になっても二人は無言に同じテーブルに座っていた。
沈黙が全員を包んでいる。誰もがこの沈黙を破りたがっていたが、ここで破ってしまったら空気を読めていないことになってしまうかもしれない。

「ねぇ」

隣から沙月が小声で衣に話しかけてくる。
衣は二人が目を離し、沙月を横目で見る。

「ん？」
「これってさぁ・・・元々の原因は衣でしょ？なんか言ってやったら？」

『響にあたしが翔一と結婚してるって言えっていうの？』

と大声で叫びたかったが、沙月だって自分達の秘密は知らない。衣はしばらくうーんと悩んでから、覚悟を決めたように顔を上げ、バッと勢い良く立った。

テーブルに座っていた三人も含め、視線が一気に衣に移る。衣はおかまいなしに翔一と響を睨みつけると、二人の元へ歩いた。

「二人とも。ちょっと一緒に来て」

翔一と響は一瞬動きが止まるが、衣のお願いということもあり、渋々と席から立つ。それを満足そうに見つめてから、衣を先頭に三人は教室から出て行く。

『ふぅ・・・・』

一気に安堵の溜息が全員の口から漏れ、桐本は冷や汗をかきながら弱々しく微笑んでいる。沙月は力つきたようにストンと椅子にもたれかかると、もう一度溜息をついた。

「あああ。辛かったぁ。あの空気マジでやめてほしいわぁ」

「本当よ。本当に死ぬかと思ったわ」

「私も。あれって敵対心むき出しだよね」

「ねぇ。二人とも衣のことが好きなのかな？」

「さぁね、あの様子じゃそうなんだろうけど」

沈黙が三人を包む。
相変わらずお互いに対してさっきから一言も交わしていない翔一と響は衣を挟んで壁によりかかっている。
美少年が二人と美少女が一人そろっていると、頬を染めがながら三人を遠すぎる人がたくさんいる。
最初に口を開いたのは、翔一だった。

「ねぇ衣。こいつ、誰？」
「翔一。『こいつ』呼ばわりはやめて」
「じゃあ、この人、誰？」

言い方は変えたがトーンが全く変わっていない翔一に対して少し困った顔をしてから、衣がちらっと響を見つめる。彼が同じことを聞きたいというのはすぐに分かる。顔に書いてあるぐらいだ。

「えっと．．．翔一には言ってなかったけど．．．．幼馴染み」
「何歳から？」

どうやらその答えは予想していたらしく、『幼馴染み』と答えた瞬間に次の質問が降り掛かってきた。
うっ、と一瞬だけ衣の答えが詰まる。

「え、と。よん、さい、だけど．．．．」

少し自分と響の関係を言うのに後悔を感じた衣だった。
正直に言って、衣と翔一はいくら結婚しているとはいえ、翔一が衣のことを知っている年数はわずか一年。それに比べて、幼馴染みの響は１３年もの付き合いなのである。
夫であれば、そんな長い付き合いの響を敵視するのは当たり前なの

だ。

そして、その通りに翔一の目は衣の答えを聞いた瞬間鋭くなった。
隣では響が勝ち誇った笑顔を浮かべてる。

「衣さ。俺と衣の関係をこいつ・・・この人に教えるつもり？」
「えっ、それしかないでしょ」
「嫌だよ。このこと知ってんのは俺と衣だけじゃん」
「でも、教えるっていっちゃったんだから―」
「じゃあ、『あのこと』じゃなくて、その前の関係みたいなもんでいいじゃん」
「でも―」
「あのさ。俺を置いてかないでくれる？」

翔一と衣が言い合いをしていると、それを不服そうに響が見つめている。
はっ、と衣が少し困った顔で響に向く。後ろで今度は翔一が勝ち誇った笑みを浮かべている。

「えと・・・あのね、響。びっくりしないで欲しいんだけど・・・・その・・・・・えと・・・・・」
「恋人だ」

口ごもっている衣を不思議そうに見つめている響に、翔一が容赦なく言葉をぶつける。

一瞬の沈黙。

ダンッ！！！

「響！！！！」

響が翔一を壁に押し付けた。衣は響の名を呼び、彼の腕にしがみつく。

騒ぎを聞いたB組や、周りの人も集まり、驚いて三人を見つめている。

所謂、修羅場だ。

衣は鋭い。

響が自分に好意を抱いていることは、小さい頃からわかっていた。だから、翔一に自分達の関係は言いたくなかったのだ。しかし、翔一は嫌っている人や、敵視している人に対しては容赦がない。だからくちごもっている衣を放っておいて、はっきりと言えたのだった。本当の事は言っていないが、二人の気持ちが通じ合っているのに変わりはなく、恋人でも夫婦でも同じだと思ったのだろう。

響はものすごい憎悪が露になっている顔で翔一を睨みつけ、翔一は顔色一つ変えずに響を睨み返している。

隣で衣が大声で怒鳴っているが、双方とも引く気はないようで、彼女の声を無視している。

「・・・・・嘘言ってんじゃねぇよ・・・・」

「嘘じゃねぇよ。周りの奴らに聞いてみろよ。衣と俺は、気持ちが通じ合っている仲なんだよ」

「調子にのってんじゃねぇよ。衣は俺のもので、俺は衣のものなんだ。小さい頃から、ずっとお互いしか見ていない。それを、ノコノコやってきたてめぇに奪われてたまるかよ！」

語尾を強めて、翔一をより強く壁に押し付ける。

思わず肩に鋭い痛みが走り、翔一が少し顔を歪める。

「響！！響！！やめて！！翔一を離して！！！」

衣は力がある。
乱暴で、女子にしては非常に力が強い。
しかし、彼女の力では勝てない男子が二人いる。

そしてそれは、小さい頃からずっと守ってくれた、光夜響と。

自分にこれでもか、と言う程に愛情を注いでくれる夫、神城翔一である。

よりによって自分が勝てない男子二人が今喧嘩を繰り広げている。
衣にはどうしようにもできない状況だった。
普段は強気で動じない衣だったが、翔一と同じで、翔一のことになると必死になってしまうのだ。

翔一は自分の手が響の両腕を掴むと、グッと力を入れた。思わず響の顔が歪む。

「お前。よく聞けよ」

静かだったが、ドスン、と低くなった翔一の声に、周りの人達が全員固まる。
響も目を見開いて翔一を見つめた。

「お前が言ってるのは『昔』の衣のことだ。でも衣は『今』にいる。『今』衣がどう思っているかが一番大事じゃねぇのかよ。お前がこいつの何を知ってるかは知らねぇけど、衣はいつまでも『昔』にいるわけじゃねぇんだよ！」

今度は翔一が語尾を強めて、響の腕を自分の肩から引き離した。すぐさま隣で驚いて立っている衣の側へ行くと、彼女を自分の後ろに引っ張り込んだ。

「しょう―」

「黙ってろ」

翔一の名前を呼ぼうとして、翔一はその言葉を遮る。その声色に思わず衣が口を覆う。

二人の前にものすごい目で翔一を睨みつけている響がいる。

「・・・・・俺は、衣を探しにここへ来たんだ。衣に再会したら、今度こそは気持ちを伝えようと思ったんだ。それなのに、なんでお前がいるんだよ！」

悔しそうに翔一を見る。

衣は彼のその表情を見て、いきなり泣きたくなる衝動に襲われた。

ああ、彼は本当に自分を好いてくれているんだな。

そう思った。

でも・・・・

「響」

静まり返った廊下に衣の声が響く。
いつのまにか周りの人達も集まり、なんの騒動だと全員が見ている。
『離れなさい！』と叫んでいる教師も、静けさに思わず黙る。
下を向いていた響が顔を上げ、翔一も驚いて自分の背後にいる妻を見つめる。
彼女が翔一の前に出ると、彼は思わず衣の腕を掴んだ。少し驚いて翔一を見るが、すぐにまた表情が微笑に変わる。
『大丈夫よ』
目で翔一にそう伝えると、彼は少し納得の行かない顔をしながらも彼女の腕を離した。
衣が翔一ににっこりと微笑む姿を見て、響が思わず目を反らす。
「響」
再び衣が響の名を呼び、彼はもう一度彼女に視線を向けた。
「何？」
翔一に話しかけた口調とは思わないほど和らいでいて、それだけで彼は心から衣を愛しているということが分かる。
その口調に衣が顔を歪める。
「あたしは、もう、『昔』の衣じゃないの」
落ち着いた口調。
「もう、響が知っている衣じゃなくなってしまったのよ」

小さな子供に言い聞かせるように驚いた響に笑いかける。

「翔一の言っていることは、嘘じゃない」

「！！」

響が目を大きく見開く。

衣の背後を見ると、翔一は視線を反らし地面を見つめている。

衣は真っ直ぐと響を見つめた。

「あたしと翔一は、確かに気持ちが通じ合っている仲なの」

もう、確信している口調で、衣は響に言った。

響は目を伏せた。

否定できない。

気持ちを変えることはできない。

衣を自分のものにすることは、もうできない。

「・・・・そうか・・・・」

静かに言い放つと、響は落ちていた自分の鞄を拾い上げる。
そのまま背を向けたが、クルッともう一度今に泣き出しそうな衣を、その背後にいる翔一を見た。

「だが。俺は諦めない。衣を、必ず自分のものにする。覚悟しておけよ」

そういうと、驚いているみんなをよそに、彼は背を向けて愁桜学園から出て行った。

第13話　修羅場（後書き）

ひびきぃ！！
なにやってんだよ！
って叫びたかった。
っていうか、叫んでた。笑

はい。
衣の奪い合いです。
というか、奪うもなにも衣の心は翔一にあると思うんですけどね・・・
どっちとくっついて欲しいですか？
っていうか、衣と翔一って結婚してるっつーの。みたいなね。

個人的には響も結構好きだったりします。
脇役では、もちろん智哉君！
転勤族だから顔が広い。
というか、知り合いが多い。

感想・評価よろしくお願いします。

ここまで読んでくれてありがとうございます

第１４話　バレた（前書き）

投稿が遅れて、本当に本当に本当にごめんなさい！！！！
言い訳に聞こえるかもですが、テスト期間で、勉強をしてまして、
小説をかく暇がなかったのです！！
本当に申し訳ないです！！

今回も最後までおつきあい願います。

第１４話　バレた

「あのさぁ・・・・いつまでそんな膨れっ面でいるつもり？」
「誰のせいだと思ってんだよ」
「えぇ？誰のせいだろうね？」

わざととぼけた声を出し、衣はメロンソーダのストローを口にした。
前には不機嫌そうな顔をして翔一が自分を見つめている。

「なんで、あいつのこと、もっと前に俺に教えてくれなかったの」
「何拗ねてんのよ。ただ単に、あんたに言う機会がなかったし、わざわざ言わないとだめの話題でもなかったでしょ？」
「でも教えてくれたっていいじゃん。衣の幼馴染みだし、衣のことが好きだし」

ますます拗ねたように言う翔一に、衣は溜息をつき、もう一度メロンソーダを飲んだ。

ここは1年A組の喫茶店。
二人ともあの騒動の後に休憩をもらい、二人で話し合っている所である。
既に騒ぎは全校に知らされてしまい、ただお茶しているだけなのに、ずいぶんと注目を浴びていた。
出来るだけ見ないようにしているのはわかるのだが、ちらちらと視線がくるため、どうしても気になってしまう。

「まあ、五年前は確かに響はあたしのことが好きだったけど、まさか五年後でもあたしのことが好きだなんてわからないじゃない。まさか来るとは夢の夢にも思ってなかったし・・・」

「でもあいつ、諦めないって言ってたよ？どうすんの？」
「うーん・・・諦めないって言ってもなぁ・・・・」
「衣。まさかあいつに心変わりとかしないよな」
「何言ってんのよ！するわけないでしょ！」

思わず必死に言うと、翔一がニッと口の両端を上げた。

「そうだよねー。衣は俺にべた惚れだもんね」
「自分で言うな」

すかさずツッコミを入れるが、翔一は気にせずニヤニヤしながら自分を見つめている。
少し睨みつけてやると、わざとらしく怖い怖いと肩まで両手を上げて、メロンソーダを口にする。
衣は不貞腐れたように頬杖をつくと、前の自分の夫はますますニヤニヤし続ける。

すると、

「あ、衣！神城君！いたいた！」

声がするほうを見ると、メイド衣装を来たまま、沙月が走りよってくる。
ぶっ、と思わず衣と翔一がメロンソーダを吹きそうになる。

「さ、沙月！その格好で堂々と学校中回ってんじゃないわよ！」
「いいじゃん。目立つでしょ？」
「いや、そういう問題じゃないから」
「へへん」

得意げに笑う沙月に衣は深く溜息をつくと、メロンソーダをウェイターに渡し、席を立つ。
沙月がわざわざ自分達を探していたのは、もちろん理由があるからだろう。

「で？何の用？」
「あ、そうそう！ボケてる場合じゃなかった！ちょっと大変なの！！二人とも早く来て！」

へ？と二人がキョトンとしていると、沙月は二人の腕を掴み、ぐいぐいと引っ張って行く。
二人はお互い見合わせるが、されるがままになったまま自分達の喫茶へつく。
喫茶店の前には大きな人だかりができており、思わず衣と翔一が目を丸める。
しかも、この人だかりはどう考えても待っている客ではなく、中のもめごとに全員が注目しているような人だかりだ。

「ちょ、ちょっとごめんなさい！通して！！」

沙月が人と人の間をぬって進んで行くと、腕をひっぱられている衣と翔一も進んで行く。
というか、翔一は隣のクラスなのだが。

「さ、ちょ、沙月！何なの！？」
「っていうか、村咲さん。俺、隣のクラスなんだけど」
「いいから二人とも入って！」

「なんてことをしてくれるのよ！！！お陰でスカートが台無しよ！！」

甲高い女性の怒声が聞こえてきて、三人の動きが止まる。
喫茶店の入り口の所で凍り付いたように止まると、目の前には綺麗な長身の女性が月夜を怒鳴りつけていた。
月夜の隣には舞が立っていて、下唇をかみ、非常に困った表情をしていた。

「ほ、本当に申し訳ございません！本当にすみません！」

泣きそうな顔で何回も頭を下げている月夜と舞をみても、長身の女性は構わず彼女を怒鳴りつけている。
クッキングエリアのみんなは慌ただしく動いていて、ほかのみんなはやりづらそうに顔をしかめている。
隣の沙月も同じような困った表情で二人を見ていた。

「沙月？何これ？どうしたの？」
「そ、それがさ・・・・月夜がコーヒーを運んでたらこけちゃってそれがあのお客様にかかっちゃってさぁ・・・・運悪く、そのお客様が短気で・・・・」
「うわ。面倒くさいお客だね」
「そういうこと言っちゃだめ！」

めっ、と沙月が人差し指をたてるが、正直に言って今はそんなことをしている場合ではない。
月夜は元々気弱だからか、目に涙が溜まっている。
隣の舞も今にも泣き出しそうだ。

正直。
高校生相手に何故ここまで本気に怒っているのだろう。
というところである。

たまらず、衣は一歩踏み出し、月夜の元へ行く。

「弁償しなさいよ！！これ高かったのよ！！」

「お客様。落ち着いてくださいませ」

「こ、衣ちゃん！？」

「衣！！」

長身の女性と月夜と舞の間に入り、衣が女性客に言い放つ。

女性客は一瞬困惑した表情をするが、『お客様』と呼ばれたからには、ここの生徒だろうと思い、もう一度口を開ける。

「何！？あんたが責任者なわけ！？このシミどうしてくれんのよ！！お陰でスカートが台無しよ！！」

「それは本当に申し訳ないです」

衣が深々で頭を下げるが、口調が機械的だったのが癪に障ったのか、女性客はよりいっそう声を張り上げる。

「謝ってすむのなら警察なんて必要ないのよ！！このスカート弁償しなさいよ！！」

「ええ、そうですね。スカートは預かって、できるだけシミをおとしますが、残念ながら弁償はできません」

「何言ってるのよ！！そっちが悪いんでしょ！？」

「どっちが悪いとかそういうことを言っているのではなく、弁償はできないだけです」

「はぁ！？」

「言っておきますが」

女性客が怒鳴りかけると、衣が大きめの声で一言を発する。
その迫力に思わず女性が開いていた口を閉じ、周りのみんなも黙る。
そんな静寂の中、衣はもう一度口を開ける。

「一体、あなたは私達高校生に何を求めているのですか？スカートはお預かりしましょう。できるだけシミはおとすようにします。ですが、シミがついたぐらいで高校生に弁償を求めるあなたは、大人げないと思いますよ？」

挑発的な言葉に、挑発的にふっ、と笑ってみせると、見事に女性客の顔は真っ赤に染まった。

「――――・・・・・・・っ！！！」

なにも言えなくなり、女性客はバンっ、とテーブルを叩くと逃げるように喫茶店から出て行く。
その瞬間、

「ふぇ」

ブワっと月夜の目から涙が溢れ出てくる。
ギョっとして、みんなが彼女に駆け寄ると、涙はどんどん彼女の頬を伝って行く。

「月夜！」
「月夜、泣かないで！！」
「頑張ったねぇ、月夜！」

そんな女生徒達を見て、翔一は心底ホッとしたような笑みを浮かべ、２ーBから出て行った。

「今日はよかったね、衣」
「そうね・・・・」

疲れきった衣の鞄を持ちながら、翔一が少し前を歩いている。
二歩遅れて衣は力なく歩いている。
翔一は振り向くと、嬉しそうに衣の頭をポンポンと叩いた。

「・・・・・ねぇ。なんでそんなに嬉しそうなの」
「いやぁ、今日のハニーはかっこよかったなぁと思って―グホっ」
「いや、なにもしてないし」
「あれ？くると思ったんだけど」
「なんか疲れたせいであんたを殴る気力も出ないわよ」
「マジ？そんなに疲れた？」
「はぁ～・・・・明日もあんな客が来たらどうしよう」
「ねぇ。無視しないで」

いつもの会話を繰り広げていると、いつの間にか家についていたのか、翔一がポケットから鍵を取り出す。
それをポケーと見つめながら、衣は今日の出来事を思い返していた。
今日はたまたま自分の言葉で女性客がいなくなったからよかったのだが、もしももっと厄介な客が来たらどうするのだろうか・・・・・
はぁ・・・・と溜息をつき、翔一が開けてくれてるドアに入ろうとする。

その瞬間、

「衣？」

身体が固まる。
自分の後ろに立っていた翔一も顔が一気にこわばる。
名前が呼ばれたということは、自分の知り合いであるということ。
自分の知り合いであるということは、翔一の知り合いでもある。
そして、今降り掛かってきた声は、どう考えても男性の声だった。
自分を名前で呼ぶ男子は、衣も翔一も一人しか知らない。
恐る恐る振り向くと。
そこには最も会いたくなかった、

「ひびき・・・・・・」

光夜響が立っていた。

第１４話　バレた（後書き）

再び、投稿が遅れてごめんなさい！！
楽しみしていただいていた方々、本当に申し訳ないです！！

あ、読者数が２５０００を超えて本当にありがとうございます！！
こんな私の作品ですが、これからもよろしくお願いします。

投稿が遅れて本当にもうしわけありませんでした。

そして、ずうずうしいですが、感想・評価よろしくお願いいたします。

第１５話　秘密を明かす（前書き）

投稿遅れて申し訳ありません．．．．．

今回は衣視点です。

今回も最後までお願いします。

第１５話　秘密を明かす

――あたしってバカ？

何言ってんのよ。今頃。

――あ、それ結構傷つく。

大体ねぇ、一緒に帰ってきて見られないほうが可能性薄いんだからね。

――なんか流れで・・・・恋人って認識されちゃってるし？あは♪

あは♪じゃねぇよ。今そんな呑気な話してる場合じゃねぇだろ。

――そんな暴言吐かなくてもいいじゃない。

っていうか、いつまで現実逃避してんのよ。

――いやぁ、真面目にちょっと死にたい気分よ。

じゃあ、死んでこい。

――あ、酷い！

そろそろ現実に戻りなさい。お迎えが来るわよ。

――はぁい。じゃあ、そろそろ戻ります！

現実逃避したくなったら、いつでも現実的なあたしがいるからね。

――――嫌だわぁ・・・・・・・・・あ、いえ！了解です！

じゃあね。頑張れ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

何この静けさ。

ちょっと真面目に耐えられないんだけど。何なの！？

お願い！！誰でもいいから助けて！！！この破滅的な状況からあたしを助けだしてぇ！！！！

誰に叫んでんだよ、ってノリツッコミをしてみる。
ヤバい。むなしい。現実逃避はやめよう。
うん。
今は目の前の状況をなんとかしな―

「あのさ」

響が口を開けた瞬間、あたしと翔一の肩がビクっと跳ねる。
現在、知花家。
リビングルームであたしと翔一がソファに座り、向かい側の椅子に響が座っている。
さて、この状況になるまで、さかのぼること、五分。

「衣？」

恐る恐るあたしと翔一が振り向くと、

「ひびき・・・・・」

そこには響がいた。
なぜだ。
なぜ、こう、タイミング悪く響が現れるんだ。
後ろの翔一は振り向いたまま固まっている。
あたしは、どんな顔してるかわからなかったけど、相当驚いた顔だったと思う。

自分でもそう思ってたから。

しばらく、やりづらい沈黙が続く。

その沈黙を破ったのは、意外にも（意外じゃないか？）翔一だった。
驚愕で固まっていた顔を少しだけ緩ませ、家の前で呆然と立っている響に向いた。

「えっと、光夜？なんでここにいる」

「・・・・・・・・・・・・・・・それはこっちの台詞だ」

響が答えるまでちょっと沈黙があったのは、多分翔一が『光夜』って読んだからだと思う。うん。
だって、この二人、敵対心むき出しの状態だったし、まともに名前なんて覚えてないと思ってたもん。あたし。
結構しっかりしてるんだねぇ。

ってそんな呑気なこと言ってる場合じゃねぇ！！！！

なんだこの状況！！！
ヤバい。この状況は非常にヤバい。
『知花』と書いてある家にあたしと翔一が入ろうとした。うん。そこまではいいと思う。
響にもあたしと翔一は恋人だって認識されてるし、別に翔一があたしの家に来ても不自然なことはないだろうし・・・・・
問題はその前だろ。
翔一が、『自分のポケットから』『私の家の』『鍵を出した』。
うん。そこだね。だって響のあの表情からすると、完全にあたしと翔一が同居してることがバレてるみたいな顔だもん。

衣ちゃん。大ピーンチ☆

「お前、なんで衣の家の中に入ろうとしてるんだ」
「え？えっと、なんでだろう」
「この野郎」
「こわっ」
「っていうかお前、今日とキャラが完全に変わってるぞ」
「そういう奴なんで♪」
「気持ち悪い」
「お前、衣に負けない毒舌だな」
「それは褒め言葉と取ったほうがいいのか？」
「どっちでもいいんじゃね？」

何この会話。
違うでしょ。
ここは普通、響がめちゃめちゃあたしと翔一を問いつめる場面でしょ。
何このほのぼの会話。
っていうか、何この二人。なんでこんな落ち着いてんのよ。

「まあ、光夜？入る？お茶ぐらいしかないけど」
「なぜかお前に言われるとめちゃめちゃ腹が立つ」
「もう一度言ってやろうか？」
「殺すぞ」
「冗談冗談」

っていうか、翔一のキャラが変わってる。
理解不能だわ。こいつ。

「ちょ、ちょっと、翔一？そんな、え？ちょ、入れていいの？」

「入れちゃだめなの？」
「いや、だって。え？え？」
「いいよ、衣。詳細は中で聞くから」
入る気満々だな。
そしてそのまま響は知花家（隠れ神城家）に足を踏み入れた。

そして。現在に至る。

「あのさ」
なんでしょう？
って言いたいんだけど、なんか緊張で口が開かない。
何緊張してんだかさっぱり分からないけど。
「あのさ」
再び響が言う。
うっ・・・・・・
「何？」
ありがとう、翔一！！
ありがとう！！
って、心の中でお礼を言うけど聞こえてるわけがない。

あたしじゃなくて翔一から返事が返ってきたからなのか、響の目が少し細くなる。
それをわかってるのか、わかってないのか、翔一がにっこりと笑って、もう一度問う。

「何？」
「待て。俺が何を言いたいのかわかってて聞いてるのか？」
「さあな。何が聞きたいんだ？」
「衣。こいつはなんでこんなコロコロキャラが変わるんだ」
「ごめん。そういう奴だから許して」

あれ？
なんか自然と言葉が出た。
なんか響の不機嫌な顔が困惑に満ちる。
ああ、でも翔一って人に対してなんかそういう気持ちにさせる人なんだよね。
キャラが変わるからさ、怒りが、なんか、混乱で吹っ飛ぶっていうか。
うん。

「じゃあ聞くけど。なんでお前は衣の家に住んでるんだ」

響は翔一のこと名前で呼ぼうとは思わないのかな。
さっきから“お前”しか言ってないし。

「別に住んでないけど？」
「殴っていいか？」

いいツッコミ。
今瞬時に反応したね。

絶対に今の翔一の言葉を予想してたね。

「いや。それはやめてもらいたい」
「だったらしょうもない嘘つくな」
「へいへい」

なんか。
この二人って今日殴り合い（みたいなもの）を広げてた二人とは思えないぐらいなんか、空気が和らいでる。
やっぱ翔一のキャラのお陰？

「住んでるけど、何か？」
「開き直んな」

響が再び瞬時に反応する。
反射神経がいいのか、今の言葉を予想していたのか、どっちだかわからないけど、この二人って違う意味で気が合っているかもしれない。
けれど、響の言葉を聞いた瞬間、翔一の顔が真面目になる。
軽く溜息をついて、あたしに視線を移してから、口を開けた。

「ここまで来たら、バラしちゃったほうがいいのか？衣」
「え！？え、っと・・・・・・・ まあ、ここで隠し通すのも無理でしょ・・・・・・」
「だよなぁ」

だって響って確信してるんだもん・・・・・
どうしてあたしの家に『いるのか』じゃなくて、どうしてあたしの家に『住んでるのか』だからね。質問が。
マジでどうしよう・・・・・

「じゃあ、はっきりと言うけど」
響が無言で頷く。
「俺は衣と結婚してる」
「殴るぞ」
あ。やっぱ？
そうだよね。それが正常な人間の反応だと思うわよ。あたしは。
なんか既に拳を握ってたってるし。
「って、ちょっと待って翔一！！何拳を握り返してんのよ！！！こ
こは落ち着いて説明するところでしょ！？響もちょっと座って！！」
「ちっ・・・・」
舌打ちすんじゃねぇよ！
「衣」
あっ。
まただ・・・・・
また響の“あの顔”・・・・・・・・・
「衣」
再び呼ばれる。
どうしよう。
どうすればいいんだろう。

「ほんと？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「衣？嘘だろ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「衣？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「衣！？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「ころ―」
「本当なの！！！」

耐えられなくて、叫ぶ。

「本当なの！ごめん、響！！あたしと翔一の親が海外出張で、あたしと翔一を同居させるんだったら結婚させたほうが早いんじゃないかってことで、だから、あたし達は正式に籍を入れてるの！！」

必死だった。
わかってもらおうと必死で仕方がなかった。
だけど、

「！！」

顔を上げて響の顔を見た瞬間に、一気に罪悪感に襲われた。
彼の顔が、何もかもを失ったかのように、何よりも悲しそうだった。

「ひ、びき？」
「・・・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・・・確かに、な。」
今日久しぶりに会った時の衣は、間違いなく衣だったけど・・・・・・・こいつと一緒にいた衣は・・・・・・俺の知ってる衣じゃなかっ

たんだ・・・・・・・」
「あっ。ひ、響！ご、ごめん！ごめんね！」
「謝んなよ！！！！」
響の大きな声に、思わず目を大きく見開いた。
さっきまで黙ってみていた翔一も驚いたように顔を上げた。
「なんでだよ！？なんで謝るんだよ！謝ってほしいわけじゃねぇよ！別に、悪く思ってほしいわけじゃねぇんだよ！！」
「ひびー」
「わかってたよ！別にお前から衣を奪おうとか考えてたわけじゃねぇよ！どうせ俺じゃお前らの間には入れないと思ってたよ！」
「光夜」
「別にこのことを誰にも言いやしねぇよ。俺はそこまで性悪じゃないし」
それだけ言うと、響はソファに乗っていた鞄を持ち、振り返らずに家から出て行った。

第１５話　秘密を明かす（後書き）

投稿が遅れて本当にすみません・・・・
最近謝ってばかりですね、私。
ですが、楽しみにしていた方々本当に申し訳ないです・・・・

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第１６話　傷（前書き）

ああ、もう、なんといったらいいか・・・・・・
ごめんなさい！！！

第16話　傷

しばらく、衣は呆然と響が出て行ったドアを見つめながら立っていた。
隣で、翔一もなにも言わずにドアを見つめている。
衣のことを気にかけているわけでもないが、衣も別に気にかけてもらいたいわけではなかった。
今は、響が自分達の秘密を知ってしまったことのほうがショックだった。
よりによって響に知られるとは思っていなかった。

「よかったのか？本当のこと教えて」

やっと口を開けたのは翔一だった。
衣のほうに向かずに、ドカっとソファに腰をおろす。
衣はそんな彼の姿を横目で見ながらふぅ、と溜息をついた。

「・・・・・・仕方ないでしょ。響は自分の目であんたがあたしの家に入るのを見ちゃったんだから。隠したって全く無意味じゃない」
「まあな・・・・」

俯いてしまった衣を見て、翔一は困ったように微笑んだ。
自分に取ったら、邪魔者がいなくなったのだからこれで悩みはなくなったわけだった。
しかし、衣に取ったらやはり小さい頃からの幼馴染み。その上、一回自分が好意を寄せていた相手なのだ。他の男と結婚していると言って傷つけてしまったことは、彼女に取ったらやはり酷なことだった。

「衣」

翔一は一言妻の名を呼ぶとソファから離れ、彼女の側へ歩み寄る。
腕をひっぱり自分のほうへ振り向かせると、ギュッと強く抱きしめる。
衣も珍しく抵抗はせず、素直に彼の背中に自分の腕を回した。

「あたしのせいだ・・・・あたしが傷つけたんだ・・・・」
「誰のせいでもない。俺のせいでも、衣のせいでも、光夜のせいでもない。誰も悪くない。結果的にこうなってしまっただけなんだ」
「でも、発端はあたしよ。あたし、だよ・・・・うっ。うぅぅぅ・・・・」

必死に耐えていた衣の目から涙がこぼれ落ちる。
涙声が漏れて、ギュッと翔一の服を掴む。
翔一は優しくそんな彼女を見て、頭にキスを落とすと、より強く彼女を抱きしめた。

二人は、しばらくそのまま立っていた。

「おはよう、衣！って、どうしたの、その顔！？」
「ああ、これ？ちょっとね」

朝から元気よく声をかけてきた沙月は、衣の腫れた目を見た瞬間、笑顔が一気に顔から消えた。

衣は本当の理由なんて言えるわけがなく、へへ、と笑ってみせると、鞄を机の上においた。
理由は言えないと察した沙月は、

「そう」

と一言だけ言い、彼女の隣に腰をおろす。

「にしても、今日は珍しく神城君と一緒に登校してたじゃない？どうしたの？」
「ああ・・・・・この顔がね。心配だった見たい」

もう一度笑ってみせると、沙月も少し困ったように笑う。

「相変わらず過保護ね」
「あはは。まあね」

三回目になる衣の笑顔を見て、今度は沙月は笑わなかった。
衣が鞄から教科書を出し、机に入れ終わるのを待ってから、沙月は耐えられないかのように、口を開けた。

「衣。何かあった？」
「え？」

驚いて衣が顔を上げる。
否定しようと口を開こうとするが、沙月はもう確信に満ちていた。
いくらたったの一年の付き合いでも、やはり親友の目は欺けないな、と衣は少し苦笑を零す。
しばらく無言でいる衣を、沙月も無言で待つ。

「あの、ね」
「うん」
沙月はやっと口を開けた衣に対して、優しく一言だけ発した。
衣の声は、今にも泣き出しそうな程に震えていた。
「詳細は、あんまり、言えないんだけど」
「うん」
「こう、ずっと自分を想ってくれた人を、自ら傷つけてしまった時って、どうすればいいの？」
とても意味深な言葉が衣の口から出るとは思っていなかったらしく、沙月は何回も瞬きをした。
いつもは相談に乗ってくれるほうの衣が、こんなにも悩んでいるなんて沙月に取ったら信じがたい事実だった。
「え？神城君のこと？」
「ううん」
「ああ、まあ、そうだよね。今日一緒に登校してくれたんだから」
「うん」
じゃあ誰だろう、と悩み始めると、不意に脳裏に一人の少年が浮かぶ。
昨日、初日の文化祭の時に見かけた、衣の幼馴染み。
「もしかして・・・光夜君？」
パッと衣が顔を上げるのを見て、へぇ、と沙月は一人で納得する。
あの光夜響を、衣が傷つけた。

「え？傷つけたってどういう意味よ」
「しょ、翔一と、その、付き合ってることが・・・・・・」
「そんなの昨日既にバレてたじゃない」
「そ、そうじゃなくて、なんか、こう、うぅぅん・・・・・・・」
頭を抱え込み机にうつぶせになってしまった衣を慌てて沙月が起こす。
困った様な顔を浮かべ、頭を抱えている衣の次の言葉を待つ。
「・・・・・・・改めて・・・・・・傷つけてしまったみたいな・・・・・そんな感じなのよ・・・・」
「・・・・・・・・・・・改めて・・・・・・・？」
「うん・・・・・・」

再び衣が困った様な顔をする。
沙月は、こんな顔の衣は一度も見たことはない。
自分の知っている衣は、不公平なことが大嫌いで何が何でも正義を貫き、いつも堂々としている強気な少女だった。
だけれど、今、自分の前にいる少女は、頭を抱え込み、必死に悩んで、何かの答えを探している、どこか、弱々しい感じだった。
そりゃ、人は何か大きなことが起きると、昨日までのように同じ風に振る舞うことはできないだろう。
しかし、衣はいくら大きなことがあろうと、いつでも堂々としていた。
そんな衣を、沙月は心より尊敬していた。

「・・・・・なんか、私じゃあんまり相談にのれないみたいね」
「えっ。いや、そうじゃないの！沙月がいるだけで充分なのよ。でも・・・・・ちょっと言いづらくて・・・・・」
「そっか。まあ、悩んでることは充分分かったから、後で神城君に

相談してみたら？」
「え？どうして翔一なの？」
「神城君は、あんたがどうしてこんなに悩んでるのか知ってるでしょ？」

沙月は、すごい。
自分は、詳細などを何一つ話していないのに、つけ込まずに自分に取ってやりやすい環境をいつも提案してくれる。

「・・・・あたし。沙月が親友でよかった」
「ちょっと！何よ、それ！」

衣の言葉に沙月はすこし照れ笑いを浮かべた。

「・・・・・ま。あたしも、衣が親友でよかったけどね」

二人の少女は、思いっきり笑い合った。

第１６話　傷（後書き）

ということで、ちょっと衣と沙月の親友劇が中心になっちゃったけど、うん、違うんで。いや、そうなんですけど。こう．．．．はい。

あの。すいません。

本当に。申し訳ないでは詫びることができない気がします．．．．

ほんとにごめんなさい！！

ここまで読んでくれてありがとうございます！

第17話　ピンチ（前書き）

今回も最後までおつきあい願います。

第17話　ピンチ

さて。
問題は解決していないが、一応文化祭の二日目を迎えている、２Ｂのみんなだった。
少し元気がない衣に気遣っているのか、昨日よりも休憩時間が二回も増え、沙月も自分のためにバリバリ働いていた。

「あ、あのさ」
「ん！？」

忙しくて走り回っている沙月なのだから、返事がすこし乱暴になったが、決してそういうつもりではなく。
衣も、別にその返事にはなにも言わずに、次の言葉を口にした。

「あたしも、働いた方がいいよね？」

この言葉に沙月は一瞬止まる。
お待たせしました、と五番テーブルにチョコレートケーキを置いてから、彼女はヘッドドレスを取ると、衣を座らせる。

「あのねぇ。さっきも言ったけど、あんたはなーんにも心配しなくていいの。いつもの衣じゃないっていうことくらいみんな分かってるんだから。ここであんたが働いたら、逆にみんなが気になって仕事が進まないの」
「でも、あたし一応実行委員だし、なにもせずにいると、みんなは気にならなくても、あたしが・・・・・」
どうしても引かない衣を見て、沙月は困った顔をしてから、盛大な

溜息をついた。
その溜息に少し傷ついたが、なんとも言わずに衣は沙月の次の言葉を待った。
沙月は一瞬教室を見回したから、何かひらめいたように、嬉しそうに衣に向く。

「じゃあ！輸入頼む！」
「何よ輸入って」
「もうすぐチョコケーキとストロベリーケーキが品切れだからさ、取ってきてほしいの！給食室に頼んで、そこの冷蔵庫に保冷してあるから取ってきてくれる？」
「そういうのって普通女に頼まないよね」
「へぇ。じゃあしないんだ」

悪戯っ子の笑みを浮かべて沙月が背を向けようとするのを見て、衣はうっ、と言葉が詰まる。

「う・・・わ、わかったわよ！取って来るよ！取ってくればいいんでしょ！」

その言葉に沙月は勝ち誇ったように笑うと、ポンと彼女の背中を押す。
衣は制服に着替えてから、渋々と教室を出て行く。

「いってら～」

後ろから沙月の呑気な声が聞こえて、少し腹に立った衣であった。

愁桜学園は校舎が四つあり、第一校舎と第二校舎に教室があり、そこで出し物をしていて、第三校舎ではみんなの出し物の道具が適当に置かれている。
実際は美術室や理科室、音楽室などの部屋があるのだが、その殆どは道具で埋もれていた。

「うわっ。こんなにいるわけ？」

独り言を呟いてから、衣は第三校舎の部屋を見回していた。
給食室は第四校舎にあり、第三校舎と渡り廊下で繋がっているため、外に出ずに第四校舎に行きたいのなら、第三校舎を通るしか道はない。
一旦校舎から出て、校庭の裏に回ると第四校舎の裏口があるのだが、そこから入るのは殆どが教師。
生徒は靴を履き替えないといけないという作業が面倒で、殆どは第三校舎を通り第四校舎に行く。
衣は個人的には第三校舎の独特な匂いが嫌いであり、あまりここを通るのは好まないのだが、今日はみんなの道具が置いてあるからなのか、その独特な匂いは消えていた。
馴染みのない匂いを少し吸い込んでから、衣は第四校舎へと渡る。
近づくにつれ給食室の匂いがしてきて、衣はその匂いをたどり給食室を開けると、中には栄養士の女性がいた。

「すいません」

一言声をかけると女性は振り返り、衣の姿を見ると笑った。
もう少し年をとっていると思っていたが、意外と若くて衣は少し驚いた。

「こんにちは。どうかした？」

「こんにちは。あの、メイド喫茶をやってる2Bの知花です。チョコレートケーキとストロベリーケーキが品切れなんで、取りにきました」
「ああ、メイド喫茶ね。噂によると2Bさんはずいぶん繁盛みたいね。今日で三回目よ？ここに来るの」
「え、そうなんですか？」
「ええ。ここにある量で足りるのかどうかもわからないわ。ふふ。あ、冷蔵庫はこっちだから、ついてきて？」
「あ、はい」

栄養士の女性は一つのドアを開けると、一回入り、マスクと白衣、帽子と手袋を持って出てきた。
それを無言で衣に渡すともう一度入り、冷蔵庫の開く音がする。

「知花さんだったわよね？」
「え？あ、はい、そうです」
「本当は生徒にそこまでやらせたくないんだけど、給食室に入るのなら絶対にそれを着ないといけないのよ。ちょっとダサイけど我慢してね？」
「あ、はい」

部屋から女性の声が聞こえてきて、衣は白衣などを着ると、急いで部屋に入った。
衣の姿を見て、女性は冷蔵庫の前に彼女を立たせると、早速衣の腕の中にチョコレートケーキの入った箱を置いた。
意外と重くて、衣は一瞬よろけるが、持ち前のバランス感覚で踏ん張ると、隣の女性は、ふふふ、と笑いを零した。

「あなた一人で来たの？この量を第一校舎まで運ぶのはちょっと大変なんじゃない？」

「ああ、大丈夫ですよ」
「そう？じゃあ任せるわ」
衣は箱を両方腕の中に入れると、少し苦労しながらも２Ｂに戻って行った。

「衣遅い！！」
「こんな量を一人で運んでんのよ！遅いに決まってるでしょ！」
「衣は力持ちなんだから大丈夫でしょ！」
「意味わかんないから！重いから早くとって！！」
「あ、はーい」

沙月が衣から箱を受け取り、クッキングエリアに入って行く。
ちょっとして出て来ると、衣に向かって親指を上げる。
衣は少し困惑した表情をし、後ろを向くと、

「キャア！！」
「衣会いたかった！！」
「いつも会ってるだろーが！！抱きつくんじゃねぇよ、この下衆！！」
「いだっ！うがっ！」

思いっきり彼の頭を殴り、腹をゲシッと蹴るとさっさと教室から出て行く。
それを笑いながら翔一が追う。
沙月はそんな二人を微笑みながら見つめ、

「すいません」

「あ、はーい！」
呼ばれたテーブルへと歩を進めた。

「お願いだから後ろから抱きつくのだけはやめてくんない？」
「だって今まで俺ずっとこういう風にやってきたよ？」
「いや、だからってやってほしいわけじゃないから」
「俺やりたいから」
「意味わかんないから」

はぁ、と溜息をつき、衣は翔一の持っているキャラメルポップコーンを口に入れる。
翔一も微笑みながらポップコーンを食べる。

「・・・・元気そうでよかった」
「え？」

唐突に翔一がそんな言葉を口にし、衣は驚いて振り向く。
翔一は一瞬そんな衣に微笑みかけてから、彼女の頭をポンポンと軽く叩いた。
衣はそんな翔一を見上げながら、相も変わらず少し驚いた表情をしていた。

彼は。
自分を心配していたのか。

「翔一・・・・・・」
「ん～？」

「・・・・・ありがとう」
改めて言うのが恥ずかしかったのか、少し彼から視線を反らして言うと、気を紛らわすかのようにポップコーンを口へ運んだ。
翔一は何回か瞬きをしたが、微笑むと彼女の頭に口づけを落とした。
「・・・どういたしまして」
「！！」
公衆の面前でそんなことされ、衣は顔を真っ赤にし、その場に立ち尽くしてしまった。
翔一は憎たらしそうに真っ赤な彼女に笑いかけると、ポップコーンを彼女の手の中に入れる。
「ま、それでも食べて元気だしてね。俺は元気なハニーを見るのが―グゥハ！！」
「ちょっとほのぼのな雰囲気になったからってどさくさに紛れてハニーとか呼んでんじゃねぇよ、下衆」
「うっ・・・・いてぇ・・・・どうして衣はそんな簡単に切り替わるかな・・・・」
「誰のせいでこんなにハニーっていう言葉に敏感になってると思ってんのよ」
「え、俺？」
「なんで疑問形なの。あんたしかいないでしょうが！！！」
もう一度ガン、と彼の頭を一発殴ると、彼はいってぇ、と言いながらその場にうずくまり、２Ｂへ去って行く衣の後ろ姿を笑いながら見つめていた。
二人の関係を知っているものにとったら日常茶番だが、彼らの関係を知らないものにとったら、翔一はおそらく重度のＭとして頭の中

にインプットされたことだろう。

「ただいま〜」
「おっ、ナイスタイミング、衣！ちょっと手伝って！」

２Ｂに入るや否や、いきなり舞と沙月にひっぱられ、メイド服に着替えさせられる。
先程まで休ませるといったのに、相変わらずこの二人はむちゃくちゃだ。

「ちょ、何よ二人とも！さっきまであたしを休ませてたのに！」
「何言ってんのよ！文化祭最後の瞬間まで近づいてきてるのよ！！ここで最後の客寄せをするのよ！！最優秀賞狙ってるんだからね！！」
「え、いつから？」
「最初から！！」

そう叫ぶと沙月は衣の腕をひっぱり店の前に立つ。
正直言って、二人のメイド姿はとても目立ち、おまけに二人とも美人だということもあり、一気に周りの人の注目を引いた。
これが狙いだったのか、沙月はどこからもってきたのか、拡声器を口に当てる。

『２Ｂの出し物メイド喫茶へどうぞ寄ってください！！！可愛いメイドと格好いい執事が勢揃いの一石二鳥のメイド喫茶です！！！』
「沙月。その使い方違うと思う」
『盛大に盛り上がったこの愁桜際もだんだん最後に近づいてきております！！私達２Ｂは最後の一時間になると、ケーキやドリンクな

ど、全ての出し物が半額になります！！ぜひともみなさん！！最優秀賞に２Ｂをお願いします！！！』

「なんで選挙なのよ」

『何言ってんのよ。選挙のノリでやんないと誰も来ないじゃない』

拡声器を持ったまま衣のツッコミに答え、周りから少し笑い声が聞こえて来る。

ほら、と嬉しそうに言うと、沙月は再び拡声器を口に当てて宣伝を続ける。

はぁ・・・・と盛大な溜息をつくと、衣は近くにある椅子を引いてそこに座る。

ふわぁ、とあくびをすると行き交う人々に視線を向けた。

昨日とは明らかに人数が増えており、今日の売り上げもすごかった。隣のクラスや、他のクラスも、行列がない所がなく、それだけでどれぐらいみんなが頑張っているのかが分かる。

去年も愁桜際には参加しているが、ここまで人は多くなかった。むしろ、思ったよりも人が来なくてがっかりしたくらいだ。それに比べて今年はすごい。

やはり、去年の分みんなが頑張っているのだろう。

そこで、ふと衣の視線が止まる。

一人の男性がなにもせずに壁によりかかっている。

人を待っているようにも見えないし、だからと言って何かを探しているようにも見えない。

その時。

彼の手が、彼の側を通り過ぎた女性の鞄に入り、中から黒いものを取り出す。

財布だ。
女性はなにも気づかずに友達と喋りながらそのまま進む。
それを見て、男性は彼女と反対方向に歩き出す。
衣が目を大きく見開きのも一瞬、ガタンと椅子を後ろに倒すと一気に走り出した。

『えっ？ちょ、衣！？』

後ろから沙月の声が聞こえて来るが、今はそれどころではない。
衣は人の間を縫って行くと、だんだんと先程の男が見えて来る。

「ちょっとあんた！！待ちなさいよ！！！」

衣の声を聞いて男性が振り向くと、ビクっと跳ねて一気に走り出した。
予想以上に早くて、五分も走ると彼の姿が見えなくなってしまった。
急いでそのまま走り続け、男が出て行った裏門から出る。

瞬間、

「あっ！！」

頭に衝撃が走り、衣の目の前が真っ暗になった。

第17話　ピンチ（後書き）

ちょっと非現実的かもしれないけど、まあ、男の方の必死さがつぎので伝わるんで、なんとか次回まではよろしくお願いします＞＜

因みに更新が遅れたのにも関わらず、みなさん読んでくださって誠にありがとうございます！！

もう、この上ないほど嬉しいです！！

感想・評価よろしくお願いします。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第１８話　弱い誘拐犯（前書き）

遅れちゃったごめんなさい。

今回も最後までおつきあい願います。

第１８話　弱い誘拐犯

沙月は学校の廊下をメイド姿のまま走っていた。
しばらく走っていると探していた人の背中が見えて、急いで彼に駆け寄った。

「神城君！」
「んにゃ？おっ、村咲さん。どうしたの？」

いきなり呼びかけられて、翔一は驚いて振り向いた。
止まった翔一に追いつくと、沙月は相当速く走っていたのか、ハァハァ、と息が切れている。
落ち着いてきた頃にパッと顔を上げると、少し不安そうな顔をしていた。

「あのさ、衣知らない？」
「え？」

予想外の質問が降り掛かってきて、翔一は再び驚いた。
彼も丁度衣を探していて、沙月を探していた所だったのだ。

「俺はてっきり村咲さんといると思って今探してたんだけど・・・」
「嘘！？本当！？うぅぅぅ・・・・どうしよう・・・・いきなりいなくなっちゃったから・・・・」
「え？でも一緒に宣伝してたよね」
「そうなんだけど・・・・いきなり走り出したから追いかけたんだけど、ほら、あの子速いからすぐ見失っちゃって・・・・どうしよう・・・・・」

うぅぅぅ・・・・と頭を抱えて考え込む沙月に翔一は困った様な顔をした。
衣は決して自分から他の人に迷惑をかけるような子じゃないし、何かあった時は連絡をいれることは決して忘れない。
そんな衣がいきなりいなくなったのは何か理由があるに違いないのだが・・・・・・

「あ、あの～・・・・」

控えめな声が二人に降り掛かってきて、二人は驚いて振り向いた。
自分達に声をかけたのは小さくなっている女の子で、恐らく愁桜の一年生だろう。

「どうかした？」

沙月が声をかけると、少女はますます小さくなり、少し目をキョロキョロさせた。
そんなにも自分達に声をかけることに緊張するのか。
しばらく三人で黙っていると、少女はやっと口を開いた。

「私・・・・さっき、知花先輩が誰かを追いかけて裏門から出てくのをみたんですけど・・・・・」
「「え！？」」

二人の声は大きく、声をかけた少女は目を大きく見開いた。
沙月はガシッと彼女の両肩を掴んだ。

「それいつ！？何分ぐらい前！？誰かって、どういう人だった！？」
「え、あ、え、あ、あの、た、確か１０分ぐらい前で、お、追いかけてた人は黒い服を着た、多分、男の人だと・・・・・」

「裏門よね！ほら、神城君！行くわよ！！」
「え！？ちょ、ちょっと村咲さん！！あ、ありがとね！」
「あ、は、はい」
呆然とした少女を放っておいたまま、沙月と翔一は裏門へと走り出した。
二人は裏門を出ると、ピタっと何かを見て止まった。
「・・・・・血・・・・・・？」
「・・・・・嘘だろ・・・・・」
「いや、でも、例えこれが衣の血だとしても、ちょっと殴られただけで致命傷なんかじゃないよ、きっと」
「ああ、そうだろうけど・・・・・」
「もしかして、さらわれたのかな・・・・」
「んな、漫画じゃあるまいし」
「いや、わかんないよ。もしかして、何かあったのかもしれない・・・・・」
「何があったって？」
二人の後ろから聞いたことがある声が聞こえ、二人は驚いて振り向くと、そこには見慣れた顔が偉そうに立っていた。
衣は目を開けて起き上がろうとすると、頭に激しい痛みが走った。

「いたっ・・・・・もう、何なのよ・・・・・！」

頭の裏を抑えながら起き上がり、周りを見る。
周りを見回すと、てっきりどこかのドラマで出て来るコンクリートの出口もないボロボロな建物だと思っていたが、意外とそんなことはなく、普通にカーペットの一つの部屋だった。
しかし何の家具もなく、あるのは小さなポットと小さい冷蔵庫のみ。どこかの貧乏な大学生が住んでいるような所だ。いや、流石の貧乏な大学生も家具はあるが。

「ちょっと。誰かいないの？」

大声で叫ぶのはどう考えても無意味で、普通に喋っても、この部屋のどこにいても聞こえるだろう。
案の定、その声に真っ正面にあったドアゆっくりと開いた。
今更ながら自分がどういう立場なのかを自覚したのか、急に身体が強ばる気がした。
身体を硬直させたまま開いたドアを見つめていると、少し困惑していた表情の男性が現れた。

「あの・・・・大丈夫かな・・・？」

その彼の一言に衣の目が点になる。

「え？」

素っ頓狂な声が出たのも無理はない。
その男の姿は、そこら中にいる普通の男性よりも遥かに弱そうな物腰だったのだ。
細い顔にヒョロっとした細い身体。

黒の半袖に茶色の長ズボンを履いている普通の男性だった。

「あの・・・？大丈夫？」

彼が自分のことを心配しているのだと分かり、衣は困惑しながらも思ったことを口にした。

「大丈夫に見える？見えるの？見えるんだったらあんたは相当なバカね。頭は痛いしメイド服のまま連れ去られるし、文化祭が終わるまで後二時間しかないのにわけのわからない弱そうな男にさらわれるし。大丈夫に見える？」

「あ、見えないです。ごめんなさい」

「わかってるんだったらいいのよ」

どっちがさらってどっちがさらわれたのか全くわからない状況だ。衣はこんな物腰が弱い男だということに感謝し、近くにあった椅子に座り直すと頭の裏を押さえた。

「痛い・・・」

そう呟くと、目の前にいた男性は慌てた。

「あ、ごめん！そんなに強く叩くつもりじゃなかったんだ！」

「叩くっていうか殴ったわよね」

「あれはなんというか咄嗟に！」

「お前は咄嗟で人を殴るのか」

「いえ、その、だって必死だったんだもん！」

「どこの子供よあんたは！！」

衣が怒鳴りつけると男性は小さくなり、しゅんと部屋の隅っこで膝

を抱える。
今にもキノコが生えそうだ。
衣ははぁ、と深い溜息をつくと、部屋を一瞬見回してから、小さくなっている男性に視線を向けた。
自分と視線が合うと男性はビクっと身体を強ばらせる。
その姿を見て、衣が眉を上げる。

「あんたさ。よくそんな性格で人の財布盗もうだなんて考えたわね」
「いや、だって・・・・・その・・・・・・・」
「何よ。はっきり言いなさいよ」
「その、見ての通り、僕はすごく貧乏なんだ」
「ああ、それは見ればわかるわ。あたしはてっきりわざと家具を入れてないんだと思った。貧乏通り越してるわよ、あんた」
「うぐっ。君、結構辛口だね」
「よく言われるわ」

なぜか普通の会話が繰り広げられていた。
というか、さらったものとさらわれたものの態度が全く逆なのがどう考えてもおかしい。

「それで？貧乏だから人の財布を盗もうと思ったわけね」
「う、そ、そうなんだ・・・・・文化祭だしそんなことが起こるなんて誰も思ってないだろうから、油断してると思って・・・・・」
「まあ、確かに油断してたわね。でも、その格好が原因ね」
「え？格好？」
「だって明らかに怪しいでしょ？全身真っ黒の男が壁によりかかって周りをキョロキョロ見回してたら誰だって怪しいと思うわよ。あんたは気づいてなかったみたいだけど、結構周りの人には避けられてたわよ？まあ、運悪くあたしはしっかり見てたけど。全てを」
「君が見てなかったら僕はなにも言われずにいけたのに・・・・」

「ちょっと。なめないでよ。あんたを見てたのはあたしだけじゃないわよ。ただ単に追いかけるのがあたしだっただけ。まあ、自慢じゃないけど、あたし、足は速いほうだから」
「そうだよね・・・・僕だって高校の頃は陸上部のエースだったのに、そんな僕を追いかけることができたのは君だけだよ・・・・・」
「あたしもまさかあんたみたいなヘナチョコな野郎があんなに速いとは思わなかったわ」
「へ、ヘナチョコって失礼だろ！！」
「何？違うっていうの？」

立ち上がった男性を見て、衣は余裕の表情で返した。
男性はそんな彼女の言葉に言葉が詰まる。

「・・・・君ってすごい強気な子だよね・・・・」
「何を今頃」
「だってさ、普通さらわれたらおとなしく言うこと聞くでしょ！？」
「何キレてんのよ。そんな弱い印象を与えたあんたが悪いのよ」
「僕！？僕が悪いの！？」
「だってさ！客観的に自分を見て見なさいよ！どう考えてもビビる奴なんていないわよ！」
「失礼だな！！」
「悪い！？」

いつの間にか両者が立って睨み合っていて、息が上がっていた。
二人ともそれに気づくともう一度座り直した。
衣は困ったように額に手を置き、男性は不機嫌そうな顔であぐらをかいて座っている。
しばらくそのまま五分ほど経つと、衣が席から立ち上がり、ドアへと向かった。
それを見て男性が慌てて立ち上がる。

「ちょ、ちょっとどこ行くの！」
「帰るのよ。当たり前でしょ？」
「いやいや！ここで君を帰すわけにはいかないよ！僕の盗む所見られちゃったし」
「言っとくけどね。見てたのはあたしだけじゃないわよ。どっちにしろあんたは既に通報されてるはずよ」
「そ、そんな・・・・・」

男性がペタっと地面に座り込むのをみて、衣は本日二回目の溜息をついた。
その溜息を聞いて、男性は少し不機嫌になる。

「そんなに呆れた様な溜息つかなくてもいいじゃないか！」
「だって呆れてるんだもん。仕方ないでしょ。あんたみたいなみっともない大人は初めて見たわ」
「酷い！酷いよ！君すっごい酷いよ！！僕の方こそ君みたいな酷い人間は見たことがないよ！」
「なんとでも言いなさい！ちっとも傷ついてないわ！」
「なんだと！」
「何よ！！」

何気なく打ち解けているような二人だった。
すると、次の瞬間、

バンッ！！！

ものすごい音がし、二人の動きがピタっと止まる。
驚いて振り向くと、先程まで衣が出て行こうとしたドアが倒されていた。

そのドアを倒した人を見て、衣は目を大きく見開いた。

第１８話　弱い誘拐犯（後書き）

ということで、誰が倒したのかはわからないままでーす。
まあ、皆さんが思っている方は約二人しか思い浮かばないと思いますが。

さて。
まずは遅れてごめんなさい。
なんか、最近いろいろありすぎて・・・・
っていう言い訳はなしにします。
はい。ごめんなさい。

そして図々しいですが感想・評価よろしくお願いしますｏｒｚ

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第１９話　白馬の王子様？（前書き）

こんな小説でも読んでくださる方々本当にありがとうございます。

今回も最後までお付き合い願います。

第19話　白馬の王子様？

「響・・・・・？どうやって、ここが・・・・・っていうかどうしてここに」

衣が呟くと、ドアを蹴り開けた響が先程まで言い争っていた男性を睨みつけた。

ひっ、と小さく男性が怖じ気つくがそんなものは無視して彼は衣の腕をもって彼女をドアのほうへと引っぱる。

流石にこれには男性も慌てる。

「ちょ、ちょっと待ってよ！その子をどこにつれてくつもり！？」

「どこってどこだと思うよ？」

憎たらしそうに口の端を上げて笑う響を見て、男性はうっと言葉が詰まる。

その姿を見て衣が心底呆れた顔をする。

こいつは本当にバカだな。

「財布」

「へ？」

唐突に衣が言い出すので、男性は思わずマヌケな返事をする。

衣が溜息をつく。

「財布。あたしにちょうだい？」

「いやいやいや！そんな首捻って可愛く言われてもこれは返せないって！！」

「チッ・・・・」
「え、チッって・・・・」
「言ってないわよ。早くその財布をあたしに渡しなさい」
「なんで君に命令されないといけないわけ！？」
「何？命令しちゃだめだっていうの？」
「いえ滅相もございません」

しゅんと再び隅っこでいじける男性を見て、響が少し引いた表情で衣と男性を交互に見る。
どうやらそこまで急がなくても衣は結構大丈夫そうだ。

響は、衣に会いに文化祭に来ていた。
そこで彼女を探している間に翔一と沙月が校門の所にいるのをたまたま見つけて、彼女達に聞こうと思った所、衣が誘拐されたかもしれないという会話を聞き取ったのだった。
それを聞いた響はそのような男を見た証言をもとにここまでたどり着いたのだ。
しかし、今のこの状況を見るとそこまで切羽詰まらなくても当分は大丈夫そうだ。

（さらわれたのって、衣だよな？）

小さな疑問が生まれたが、それはさておき。
この状況。どうする？

「おい衣。そんな奴に話が通じると思うのかよ」
「一応人間だもの。良心はあるでしょうよ」
「人間に『一応』ってつけないでくれよ。傷つくじゃないか」
「言っておくけどあたし毒舌だから。もっと傷つきたくないんだったらその財布をあたしに渡しなさい。このままだとあんたは逮捕さ

れて人生そこで終わり。釈放された後にあんたに仕事をさせる奴なんてきっといないわよ。今ここでおとなしくあたしに財布を渡して、自力で仕事を見つけてお金稼いだ方が絶対将来ためになるわよ」

「・・・・・・・・・」

意外とまともな意見に部屋が静まり返る。

男性は衣の言葉を聞いて俯くと、ポケットから怖ず怖ずと財布を取り出す。

笑ってそれを受け取ると、衣と響は部屋の外へと向かった。

「・・・・やっぱり。僕は君が嫌いだよ・・・・」

その言葉を聞いて笑いながら衣が振り向いた。

「お互い様よ」

「衣！」

「衣！大丈夫！？」

建物の外へ出た瞬間、息が切れている翔一と沙月が同時に抱きついてきた。

思わずバランスを崩すが、持ち前の反射神経で立て直すと二人の背中に腕を回す。

そこまで怖い思いをしたわけではないが、第三者としては『誘拐』と聞くだけでずいぶんと怖いことを想像するだろう。
それを悟って、衣は顔に微笑を浮かべた。

「大丈夫よ。そこまで怖い奴じゃなかったし。財布も取り返したから」
「財布？」

一旦自分から離れて沙月が首を傾げる。
そういえば言っていなかった。

「あ、だから。あたしがあの時いなくなったのはこの中にいる奴が財布を盗んで、あたしがそれを取り返そうと思って追いかけたの。そんで学校から出た所を殴られて気絶してそのまま連れ去られた、みたいな？」
「みたいな？じゃねぇだろ。俺と村咲さんがどれだけ心配したと思ってんだよ」
「ごめんね。心配かけちゃって」

愛おしそうに翔一の頭を撫でると、彼はもう一度ギュッと衣を抱きしめる。
沙月は微笑んでそれを見ていたが、はっと隣にいる響を見た。
彼は顔には出していないものの、とても苦しいだろうな、と勝手に思う。
自分の好きな人が違う男に抱きしめられているのだから、苦しくないわけはない。
一瞬同情しそうになるが、そんなことは求めていないだろうなと思って、沙月は再び衣と翔一に目を向ける。
やっと解放してくれた翔一に笑いかけると、衣は響の方へ向く。

少し驚いて響が目を見開く。

「響も、ありがとね。助けてくれて」

衣の微笑みを見て、響は思わず笑い返した。
彼女はいつもと変わらず自分と接してくれる。それで充分じゃないか。
大好きな笑顔を自分に向けてくれるだけで、響は少し嬉しくなった。
なんて単純なんだろうと、自分でも笑うしかない。

「いや。衣が無事でよかったよ」
「そこまで怖くなかったしね。えへへ。あ、そういえば響、うちの文化祭に来てたんでしょ？どうしたの？」

衣に言われて響ははっとした。
そうだ。元々は衣にある報告をしに文化祭にきたのだ。
すっかり頭から抜け落ちていた。

「そうそう。衣に報告があったんだ」
「「「報告？」」」

衣に言ったつもりだったのだが、翔一と沙月の声も重なり少し目を見開く。
が、全員に聞いてもらったほうがいい話だと思ったので、まあいいかと言葉を続ける。

「俺、愁桜に転校することになったんだ」

第１９話　白馬の王子様？（後書き）

気づけば四ヶ月以上経っていた．．．．．
ほんとに。
ほんとにもう言葉が見つからないぐらい申し訳ないです！＞＜

こんな私の小説なのに読者様がたくさんいて本当に嬉しいです＞＜
これからもよろしくお願いしますｏｒｚ

ここまで読んでくれてありがとうございます。

第２０話　冗談キツイ（前書き）

本当にごめんなさい。

第２０話　冗談キツイ

「おいおいおいおいちょっと待て」

最初に我に返ったのは翔一だった。
それに続いて衣と沙月も我に返る。
しかし、驚きは隠されていない。
二人はお互いを見てから、翔一に視線を移し、それから響にも視線を移す。
ちっとも状況が飲み込めない。
一方の響は翔一の次の言葉を静かに待っていた。

ちょっとこめかみを押さえてから翔一が再び口を開いた。

「お前。冗談キツいぞ」
「俺が冗談でこんなこと言うと思ってんのか」
「思ってる」
「お前マジでなんでそんなに性格がコロコロ変わるんだよ」
「それが俺の長所だから」
「自分で言うな」

何気に漫才みたいな会話を交わす二人を衣と沙月は無言で見つめていた。
ライバルなのか友達なのか。
いや、友達でないのは確かだろうが、だからと言って会った当初のような敵対心むき出しのような雰囲気はない。
それは衣や沙月に取ったらとてもいいことなのだが、今はそんなことは思っている場合ではない。

呆れた様にはぁ、と溜息をつくと、翔一は再び口を開いた。
「お前が俺達の学校に転入するってマジあり得ないんですけど」
「誰だよお前」
「神城翔一だけど何か」
「うぜぇ。お前ほどうざい奴は初めて会った」
「そりゃどうも」
「褒めてねぇよ」
「ちょ、ちょっと待って響」

二人の会話がヒートアップする前にすかさず衣が割って入る。
彼女の言葉に瞬時に黙り込む二人を見て、沙月はまるで主人に従う犬のようだと思わずにはいられなかった。
笑わない様に少し口元を隠すと、彼女も衣の隣へと歩み寄る。

衣の言葉に彼女を見つめていた響の目がチラっと沙月を見るが、すぐにまた衣に焦点を合わせる。
翔一も衣の言葉を待っている。

「最初から説明してくれない？響が愁桜に転校するなんて初めて聞いたし。編入試験だって簡単なわけじゃ・・・・・ まあでも響の頭脳なら大丈夫か・・・」

衣の最後の言葉を無視して、周りを少し見回してから響は説明するのが面倒くさいように口を開いた。
その姿を見た翔一が眉を上げた。

「元々衣を見つけたらその学校に転校しようとは思ってたんだ。何年間も離ればなれだったわけだし、俺はいつだって衣のことを想っ

ててずっと傍らにいたいからと思ってさ。まあ、」

翔一を見て一瞬言葉を切ると、

「衣が同じ気持ちじゃなかったというのは誤算だったけど」

肩をすくんでふぅ、と少し溜息をつく。

しかし周りの者は彼と同じ様に落ち着いてはいなかった。

彼の言葉に口を開きかけた衣と翔一よりも早く、沙月がいらだったように言葉を放った。

「はぁ？あんた、衣が何年間たってても自分のことを想い続けるって思ってたわけ？どんだけ自意識過剰なのよ」

不機嫌さをまった隠さず、むしろ相手にぶつかるように言うと響がチラっと彼女の顔を見た。

沙月の言葉に驚いて目を見開いた衣と、少し驚いた様に瞬きをする翔一の間を通り抜けると、響は目の前にきた沙月を見下ろした。さすがに二十センチも慎重に差があると迫力があるのか、沙月は一歩だけ後ろに下がる。

「自意識過剰？俺は別にそんなつもりはない。俺も衣もどっちもお互いのことをすごく想っていたんだ。それはそこにいる衣も認めることだよ」

くい、と首を衣に向けると、沙月も彼女の方に視線を動かした。

いきなり振られた話題に慌てて衣が何かを言おうとするが、彼女にそんなチャンスも与えないまま、響が言葉を続けた。

「しいて言えば恋人同士が遠距離恋愛になって、五年後に再会した

みたいなもんだよ。衣もまだ俺のことが好きだと思ったんだ。どこかおかしいか？」
「っ・・・・」
響の言葉になのか、それとも彼の迫力なのか、沙月は言葉が詰まると顔を降ろした。
変わらず真剣な顔つきのまま響は振り返ると、さっきから一言も発していない知花夫妻に交互に視線を移した。
彼の視線を受けると、まるで思い出した様に衣が沙月の元へと走った。悔しそうに顔を歪めている沙月を見つめると、キッと響を睨んだ。
「衣―」
「沙月は何も知らないのにどうしてそういうこと言うの？私の心配をしてくれただけじゃない」
衣の睨んでいる顔を見て翔一が慌てて名前を呼ぶが、それを遮る様に衣のいらだった声が放たれた。
彼女のその反応はわかりきっていたように響は衣を見つめた。
「俺も本当のことを言っただけだよ、衣」
「・・・・・・・・」
「俺、来週愁桜に行くんだっていうことを報告しにきただけだから。じゃあ」
響は地面い転がっている鞄を拾い上げると、未だに呆然と自分を見つめている三人に背を向けた。
少しだけ進んでから、響は振り向いた。
「衣。無事でよかったよ」

小さな微笑を浮かべると、響は再び歩き出した。

第２０話　冗談キツイ（後書き）

ひたすら土下座いたします。
本当ごめんなさい。
言い訳をするつもりはないんですが、受験やら引っ越しやらですごく忙しくて、投稿はしてなかったんですが一応書いていたんです・・・
本当にすいませんでした＞＜
ここまで読んでくれてありがとうございます。

第２１話　不機嫌（前書き）

今回は短めです。
遅くなってしまって非常に申し訳ありません。
今回も最後までお付き合い願います。

第２１話　不機嫌

「・・・・とにかく学校に戻ろうか。勝手に抜け出したからみんなも心配してるだろうし」

しばらく呆然と立っていた衣と翔一に、沙月が静かに言い放った。

二人は無言で頷くと、歩き出した沙月の後をついていく。

やがて、衣がポツリ呟いた。

「・・・この事、みんなに言ったほうがいいかな」

「それはあんた達に任せるわよ。っていうか衣に任せるわ。あんたの幼馴染み、ってわけだし」

「ええー。じゃあ俺は何も任されないわけー？村咲さーん」

「いちいち語尾を伸ばすな。そして任せない」

冷たく言い放つ沙月にひどっ、と翔一は小さく呟いた。衣はそんな彼を慰める様に背中を撫でてあげると、翔一は「やっぱり衣が一番だー！」と叫んで彼女に抱きついた。

もちろん問答無用で投げ飛ばされた。

後ろで騒ぐ二人を放っておいて沙月は思った。

（あいつ、何考えてんのよ）

学校に戻って『衣どこいってたの！』『大丈夫！？』『何があったの！？』と質問攻めされ、みんなをなだめた後に、衣、沙月、翔一は一つにテーブルに腰を下ろしていた。三人がいない間に宣伝タイムは終わってしまい、文化祭が終わるまでやく三十分しか残っていなかった。

当然だが、この時間になると客の流れは途絶え、学校の中の賑やかさは一気になくなる。それは寂しいような気もするが、同時にやっと終わったと安心できるような気もする。

客もいないということもあり、早々に片付けを初めているみんなを眺めながら、沙月が口を開いた。

「まあ遅かれ早かれ光夜君が愁桜に来る事は分かってるんだから、わざわざ言う理由もないと言えばないんだけど・・・・」

「そうなんだよねぇ・・・・っていうかなんで？　なんで響はあたしの学校に来るの？」

「衣と同じ学校にいたいんでしょ」

不機嫌そうに言う翔一に衣と沙月は同時に苦笑を零した。

「はい拗ねない拗ねない」

からかうように翔一の頭をわしゃわしゃと撫でると、翔一は不機嫌そうなまま衣の腰に腕を回して自分に引き寄せた。頭を彼女の首元にうずめると小さく、囁く様に言った。

「・・・・衣は、俺のもんだよ・・・・」

らしくない彼の様子に一瞬衣は戸惑った。今までだって衣が告白されたことは何回かある。翔一と結婚してからも何回も告白されてい

るのだから、誰かが自分に告白して彼がこんなにも不安になる様子は見た事もなかった。
思わず頭を撫でようとして衣に、コホンと彼の囁きが聞こえなかった沙月が咳払いをする。彼女に視線を移せば、呆れた様に周りを見回している。衣も周りを見回すと出来るだけ見ないようにしてるのが分かるのだが、明らかに全員が衣と翔一のことを気にしているのが分かる。
瞬時に衣は顔が真っ赤になり、未だに首もとに顔をうずめている翔一を見た。

「・・ねぇ、翔一・・・・」
「やだ」
「何も言ってないんだけど」
「やだ」
「翔一っ！」
「やだ」

子供のように『やだ』を連発する翔一に衣は困惑した表情を見せた。彼の腕から出ようとするとますます腰に回された腕に力がこもり、衣が身動きをとれないようにする。目の前にいる沙月は呆れたように翔一を見て、効果はないと分かっていながらも『ちょっと神城君』と声をかける。それに続いて衣も翔一の腕から逃げようとする。沙月の言葉になのか、衣の行動になのかは分からないが、翔一はゆっくりと顔をあげると、名残惜しそうに衣から離れた。離れた瞬間に真っ赤のままの衣はザッと椅子を彼から少し離して机にうつぶせになった。

何回か目を瞬きしてから沙月が衣の肩に手を置く。
この様子じゃ顔がトマトのように赤いに決まってる。

「・・・・ころも？　大丈夫？」
「・・・・・・死にたい・・・・・・」
「いや、そこまでじゃないでしょ！」
「学校でだけは本当に無理・・・・」
「ってか学校以外でどこでいちゃつくのよ」
「い―」
「衣！！」

家と言いかけた衣の言葉を、聞いていなフリをして聞いていた翔一の声が遮る。沙月が驚いて彼を見て、衣は瞬時に我に返り、思わず自分の口を手で覆った。

（危ないっ・・・・・！！今のはめちゃめちゃ危なかった！）

翔一がいなかったら確実に家と言って沙月に質問攻めされるのは容易に想像できる。衣は自分を軽く睨んで来る翔一に申し訳なさそうな顔をすると、彼は少し呆れた様に溜息をついた。学校でいつもはニコニコしてる彼が学校では本性に近い性格でいるのは、恐らく響が来ることを根に持っているからだと衣は解釈した。
沙月は翔一が衣の言葉を遮ったことを特に不審がりはせず、やはり彼の変わり様に少し驚いている様子だった。
机に伏せて目線だけで翔一を見上げている衣の側によって囁く。

「神城君があんなあからさまに不機嫌になるなんて、珍しくない・・・？」
「・・・うん」

家じゃあいつもあんな感じで不機嫌だけど、と付け足したかったがなんとかそれを飲み込む。

結局その日ずっと翔一は不機嫌で、せっかく２Ｃが最優秀賞をとったと言うのに、ちっとも喜ぶ気配がなかった。

第２１話　不機嫌（後書き）

申し訳ないです本当に。
言い訳なしで本当にすみませんでしたｏｒｚ

こんな作者でもここまで読んでくれて本当にありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7964f/

旦那様はドＳ

2010年10月13日01時07分発行